親鸞聖人繪詞傳

二

親鸞聖人繪詞傳卷二

建暦元年丁卯の春北國へ流罪の雅よわひ
もとせ〳〵車の数をつらぬるに源空聖人專
修念佛興行よりて都鄙の教化風のおくにた
ゝ高名の風仰世のおくなびくりうの時南都北嶺
の僧徒讒憤をなし念佛門を停廢し
源空聖人并に門弟等を流せらるゝ事
上皇再三よりて魔障をなす事何ぞ力
御弟子の内より住蓮安樂号わやまる事有り
これよりて去御門院御宇建暦元年辛卯二

月九日 任達安樂院より出て羅刹より
同じき八日源宣聖人并に之を眤近の弟子
等を遠の宣旨有て下さるる若信房も死
罪流罪の中より議定いまだ変ぜざるに六
角西中納言親經卿の年比一家の親しみ
の時に八度より列てわりしかば宥免
て遠流より定まりぬる三月十四日夜より発
房云ける聖人の許へ御暇を乞ひ
御供ぜん人なきに我この去門より入
り来七年の春秋常随眤近しまり鶴林

の夕までも御供とこそ思ひけ
よと宣限りの涙を流して帰れ西海の浪深
あり我は北陸の雪に迷ん事有世いろ形
為縁ぞやうるそもと別を惜て又いつ逢
まるべきとして御涙よくを聖人も共ふ
や流なん明日は出も知ぬ命の再會
いかにとこむべきたづ何事も浄土にて
く御ぶとて御涙をはらはらと落る法
よ為めうきをうくべ若信房も血の形ぐ
さうとしたまへり

三月十六日卯刻よ[り]長房い[の]法東[の]尼[の]御坊より出駕[し]ましまし[て]
よ都とおて配所よ[り]ひきもどし[て]東[の]尼[の]
よ[の]ぼ[り]て三[の]時先ぶらて[の]ち[の]よ都[の][の]ぼり
罪名　流人藤井[の]長[の]
配所北陸道越後国頸城郡国府[の]御年三
十九[の][の]追捕検非違使[の]府生小椋行連送
使[の]右[の][の]門府生秋[の][の]
九條殿下より[の]日[の]御めの[の]胡金侍賀守貞
尚[の]御人送[り]て副[の]せたまひ[の][の]十三日[の][の]

て三月廿八日之頭城郡司萩原氏郡大輔幸系
ゞ許へ来たりし程なく四月七日頭城郡國分寺
の福舎に移りまする所ども狭くなりて民部少輔けるひて國分寺乃東南平屋なる
所へ居室を設ける所に住ける福居の年
の冬ハ御ぐ設も甚せまくかゝるのゞく
なく在せば愚兎と名のりたまふ又御名
も親鸞と申しけるなりと
三十九歳建暦元辛未歳十一月より居住中納
言範光卿を以て内沼と兎ぜとも速に登

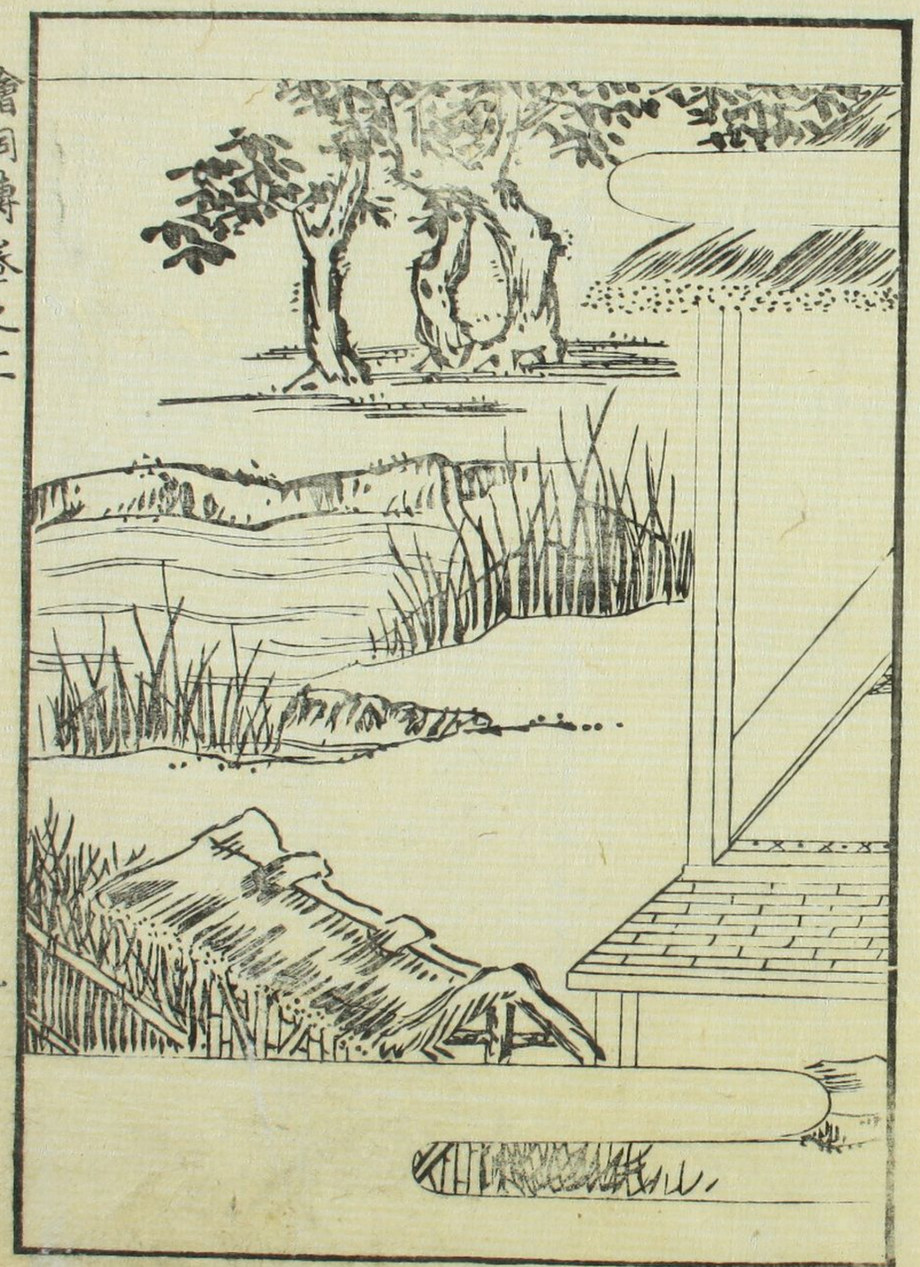
登ることなりしも扨て内沼ハ痛きふ所なりく
なる由を先御消文とうて勅免の御礼とて
書ける御消文より愚兎と書てうりあれば居
ることなる所へ移るうて空聖人
還俗の沙汰ありしかば人と初たのゞ
せて孫とうかゞ笑ひ
て空聖人ハ十二月廿日小入洛ありまひぬく慣よりせば
表より場たまはゞいそぎ内裏へ出ぬ
ぬ事も扨しも雪甚ふるして人跡も絶れば
形くに其年ハ暮ぬ

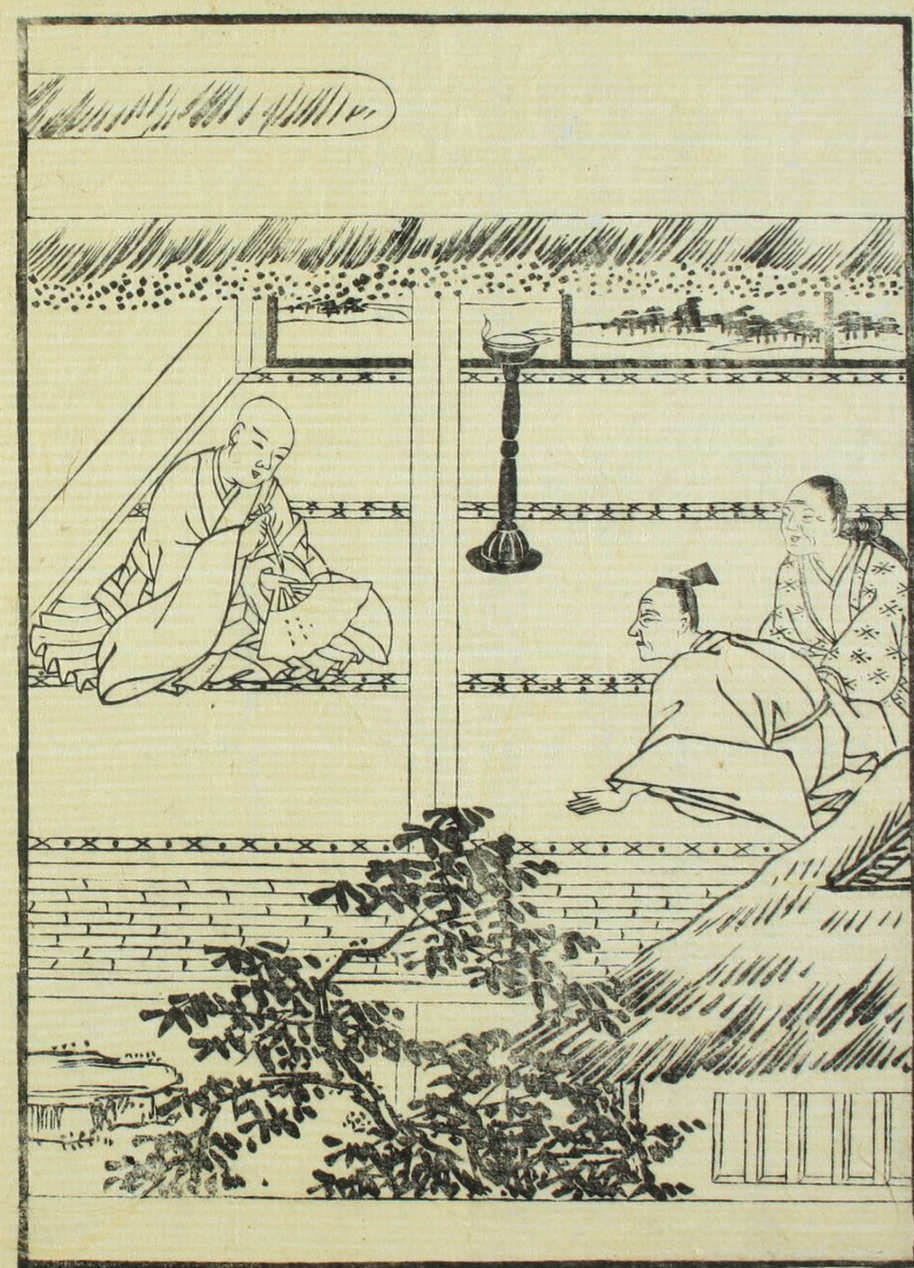
所々の年の睦月の末雪も消ぬ時て旅人の通ふ
こゝろもなく便りもなくて聊御不快なる思ひのあまりに越後
の国府と立かへりぬ北陸の嶮難御通行なりしかは供奉の人々
もなしたゝ信濃路にかゝる所にて思ひ絶なんと思
国の辺にもなりて空雪人の面もなり御
供例なれは日数を経て入滅のよし聞あひ今まで歳
石のごとく御心もちまち弱りて閑絶して衢に
倒れ血の涙を流したまひ絶入て今にあるまで血の道
名残なく今は御と永訣なりひしても論ふ事なく御夫

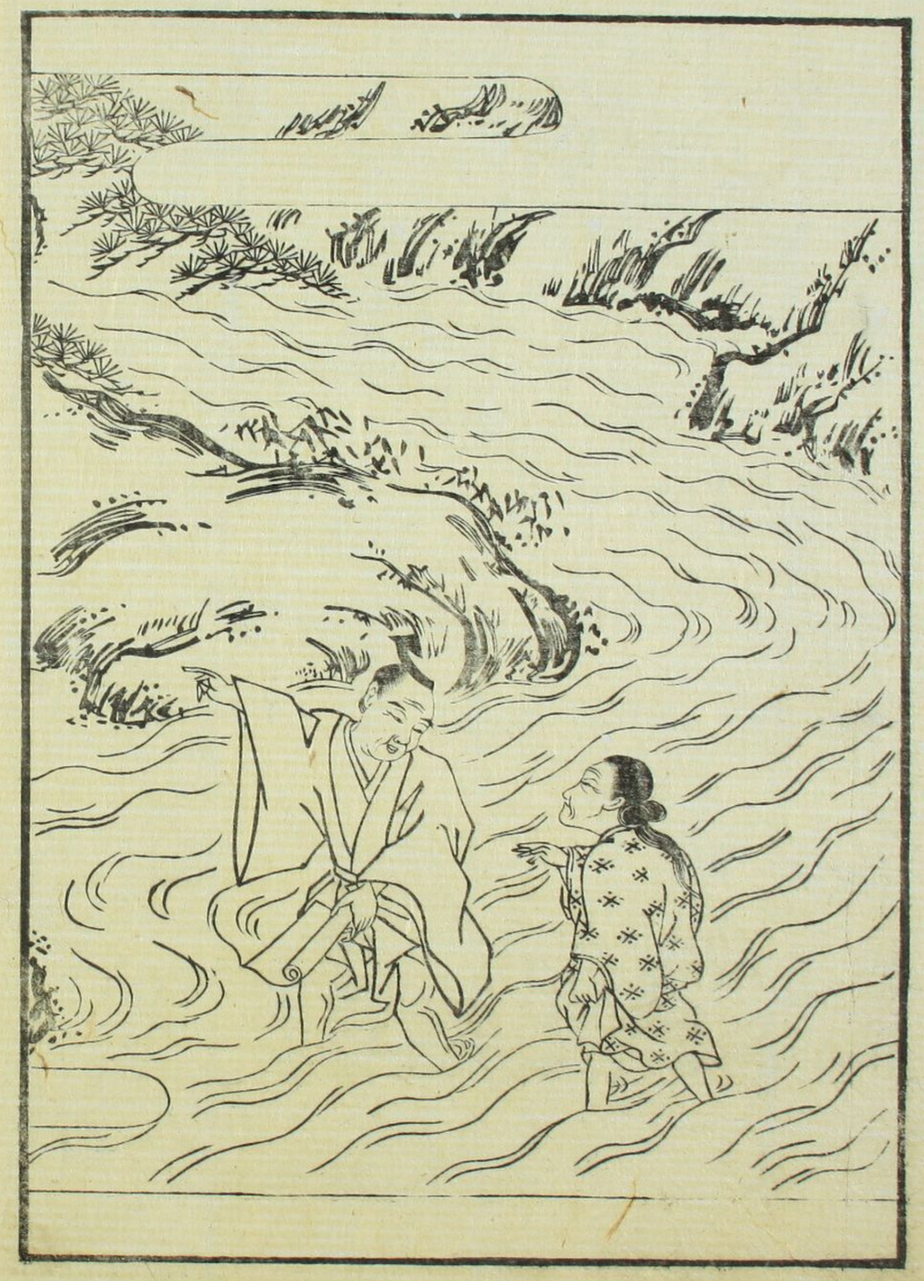
例も今度はしまねばとかゝる供奉の人々頻に留めもし
ゝ又越後へ帰りあるべき世
間落ちて隣里を尋ねといひしかは所々の化人なんと
うへ立ちて空雪人御入滅のよいよぎ給ひ入りても
何をか下御所と知る人て滅後の化儀とたゝんはて
月中旬に州信州の辺御帰国まし給る又四月下旬に
光寺小系消寺へ佛おこして通絶名僧一人中の不願状
彩色寺人其夜陽夜状ひて深く感應のむね
ざる仏ゞ多りうくて七月よりあるまで越後越中不小
りて御教化初旬形

八月半の比越後國柿崎より沙門ひとり日暮れ
及ぶんとする折ふし五月雨とやらん降り降りて
三里の留家小畠氏の門に立ち雨宿りをこひ
て一宿をもとめしかども人慳貪にして借せざ
ば人方なくて夜半るまで門のかりよましてて
柿崎をうたふ唱居しを御聲のいと殊勝なた
ふくうり名びとすがら人も感激してやはり名一宿
ぜゆるしてやり聖人出るなり辺土の衆生業感の
病原しといでも法身の恵命何ぞ法くる事なん十
方衆生の誓約なる人氏偏えんやと終夜勤ぜの人

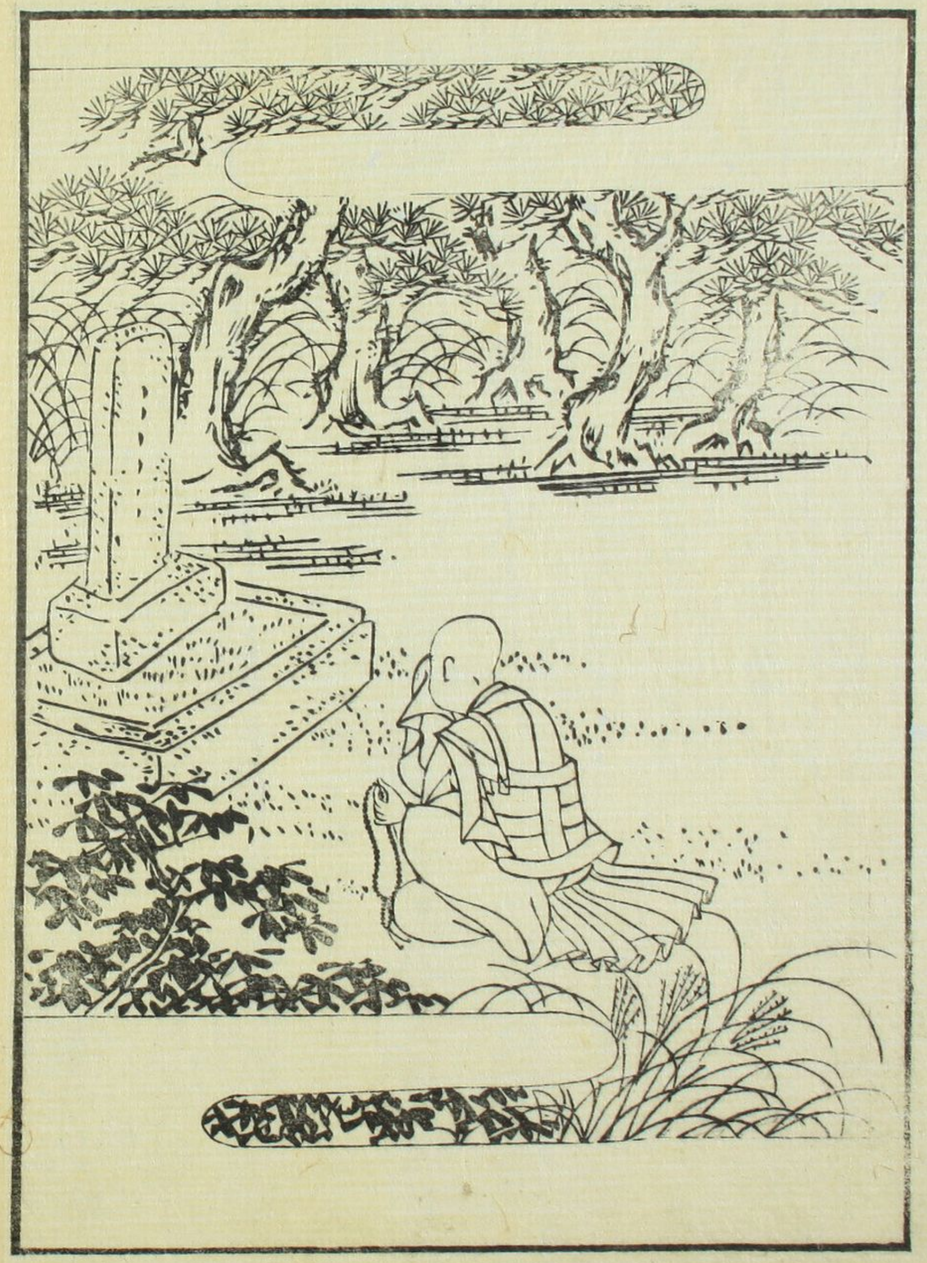
ぞ夫婦ともに涙解して信心欽感の人となりぬ
聖人も御歌のあまりにや感の御口ずさに
柿崎よ志賀の宿氏なるをなんの仏熟柿とぞ形る
く宿にとりて宿よ殘し垂暁よ及びて宿氏に
そうふ御あまりなる夫婦起出て大よおどろき
恐怖殘とそうして恐源氏志氏ふるや川を渡
つるもの老なる夫婦水を氏も知ぬ川氏越て
御をみ氏を聖人六字の寶号氏書て
與へたまふ世に川越の名号とふを
恐なり







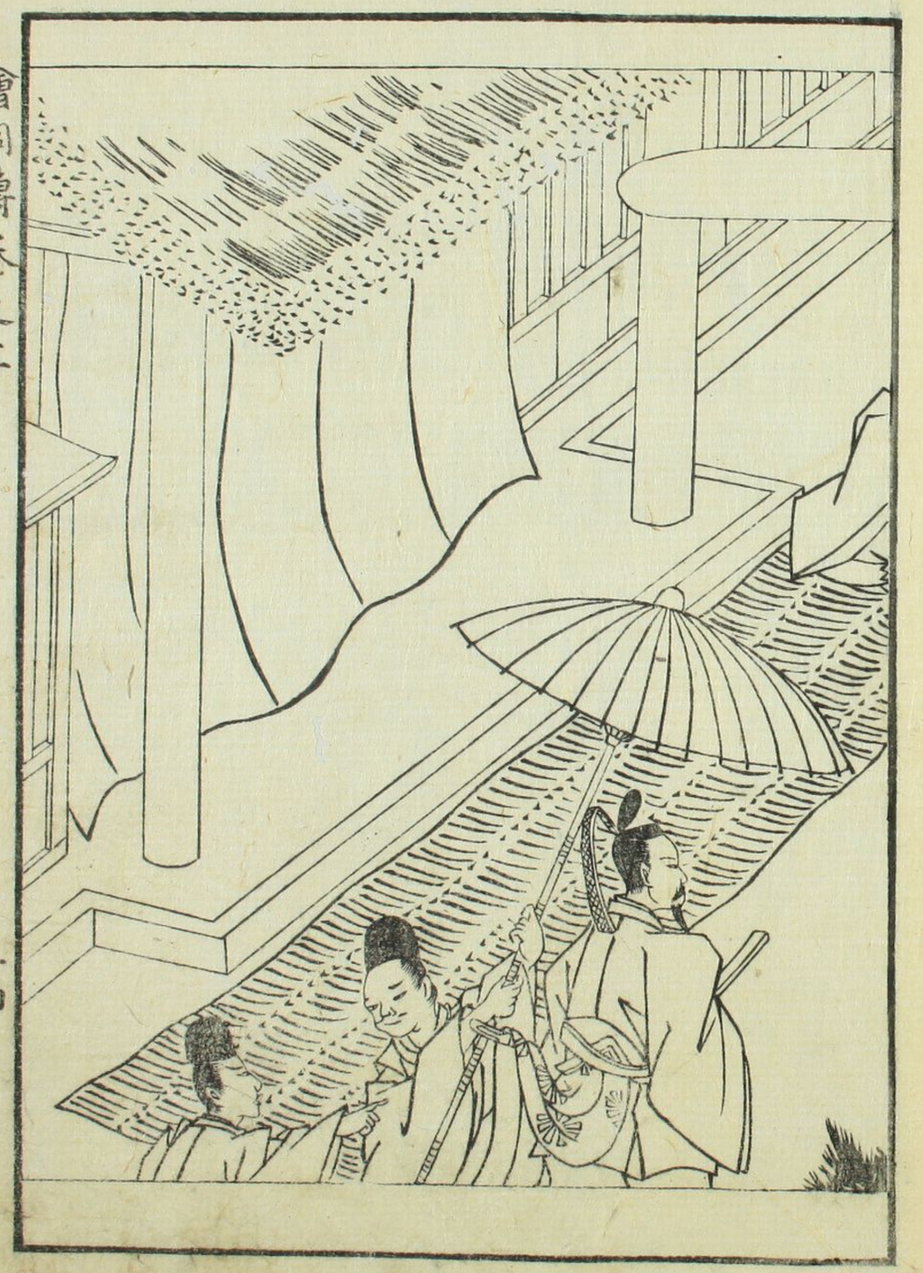
かゝりき年八月七日法ひよ越後と云おもむき
都おかへりのぼり給ふ空聖人の御墓に詣ぐ
たまひ門弟等奚乃薄きこゝろ歌を詠
給しのち年言語をたゝえうり史より尋有
傳記の里坊に入のひ範光に命て勅免
の御礼をもたまふ聖有傳法しまい聖人の
命令ありうゝて時傳記より御延氏に
つかへ給ふ所へ参いらせたまひる
叔月輪禅定の御墓なりゝ五日前乃
墳墓へも詣でゝ悲旧の涙せきあへ
たまわず印信も世代なるまゝ昔の御墓
もそい今更絶焉の山地にまわ元の事
ども語り伝へけて哀傷の涙流しと
ゝ聖人を先器持の唐室へ御帰りの
後西門院の旧坊に帰り入給ひ

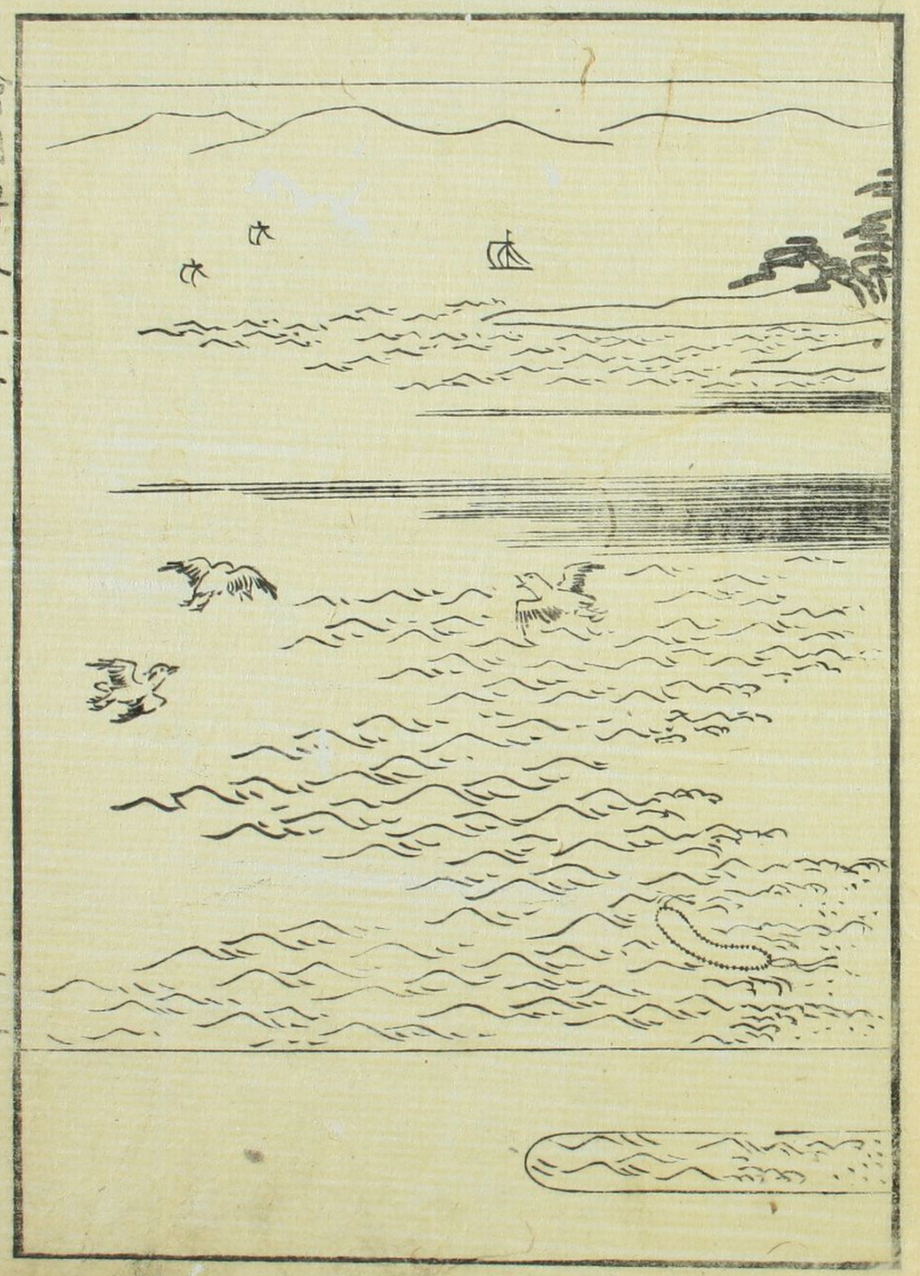


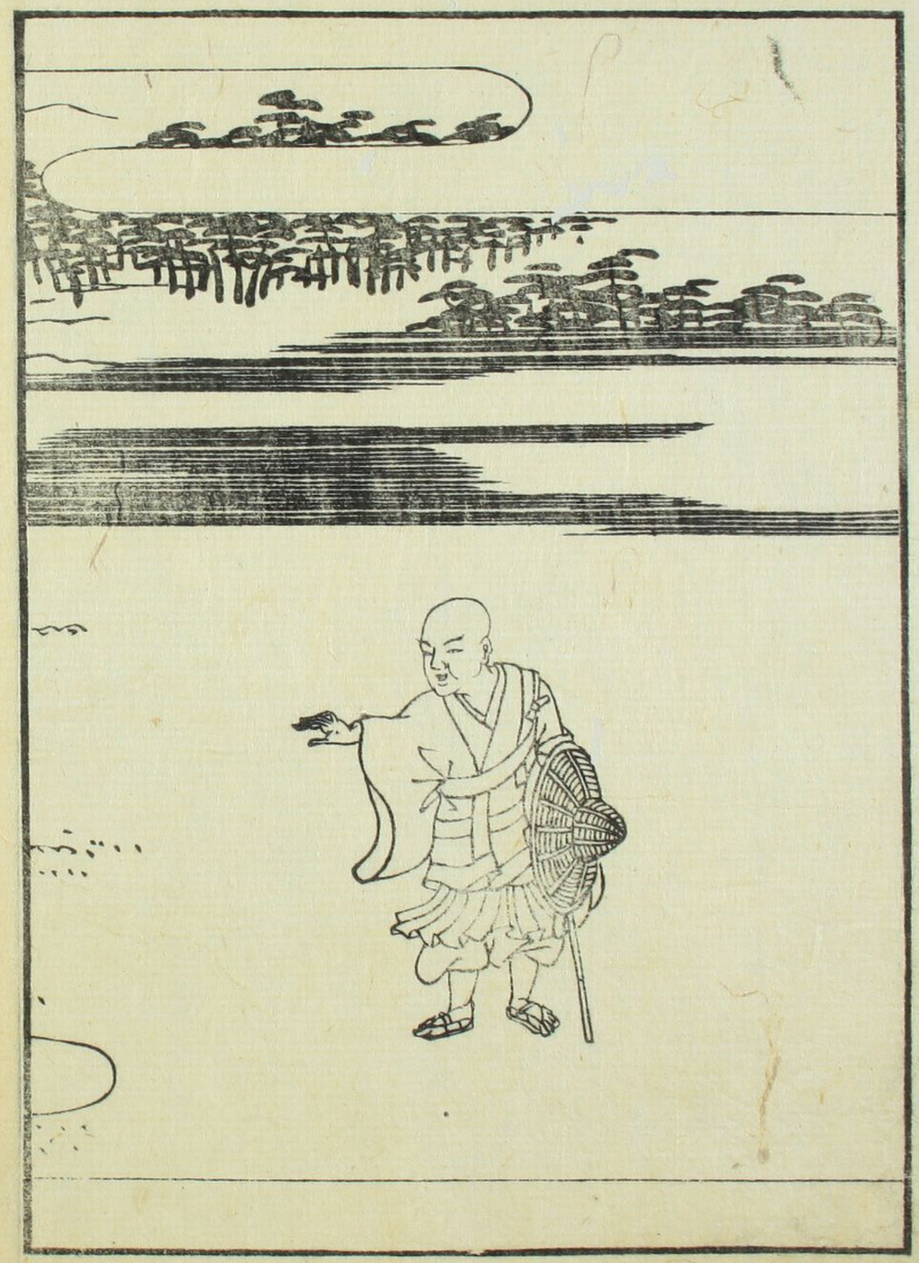
おなじき年九月聖人城州山科村より一寺
伝導創しまいらせ江州荒木村より源海を
りて信わりを人乃遠近にしりてなり後より
勅号伝賜ふ東西寺ともなづく
おなじき年十月なか辺鄙の群萌を化益
せむが為に神びと花洛と東関よりて
しきたまひて家より太神宮の宗廟より
して殊より先祖乃霊神形をあらはし神恵も
源く又和光の結縁も昌因形を称じ吸霧
洛次乃便ふりて伊勢の神宮へ参詣し

たまへるを拝しも風ありて五ツの器物
のわるど聖人の言葉に容れうかゞ驚歎し
てとうゝ見るん也人よりまさる絶倫
の貴相わり者より名倍る徳の系宮した
まへるうやまひ敬ふ事ひとしき義を
以て修飾に怠る例なりして新しき義
を以て補進を聖人こゝを用ましまして漸
神殿よりをぎたまへよ潜櫻の神官わり
物見びしる風情して跪てとさく前夜夢と
感じる心ひとり神之僕よ若たまへ明日

まゐ罷ぶむべき修の羅を以て来ることを
ひゝん見に端垣の門よりまよ我をゝ対面
せんゝ神勅くの如し辞退わる色のうゝして
来ゝの玉垣に開きゝ正殿乃石坪に入奉を
聖人二時げり急角ありて我化身まこた
神意よう多へふゝ中ゝ感激して退
おしなまひ乃る夫ゝ竹都に来ゝ国人
坂と色ゝ阿古来ゝ浦に眺ゝ竜藝那
の名乃道に来ゝ入江の磯よ白砂ゝ
よ俗て花孔ゝ立ゝ寄来る浪の



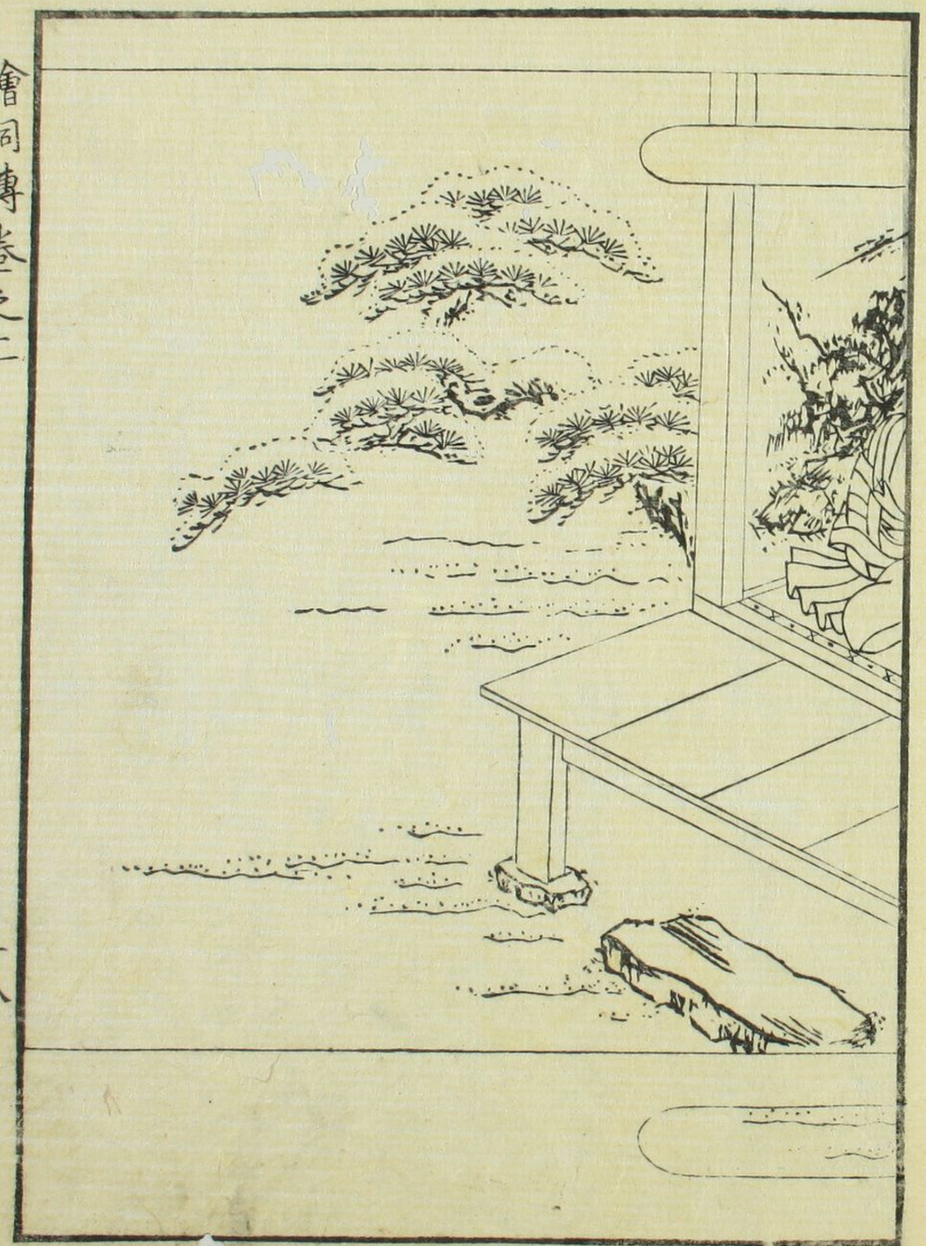


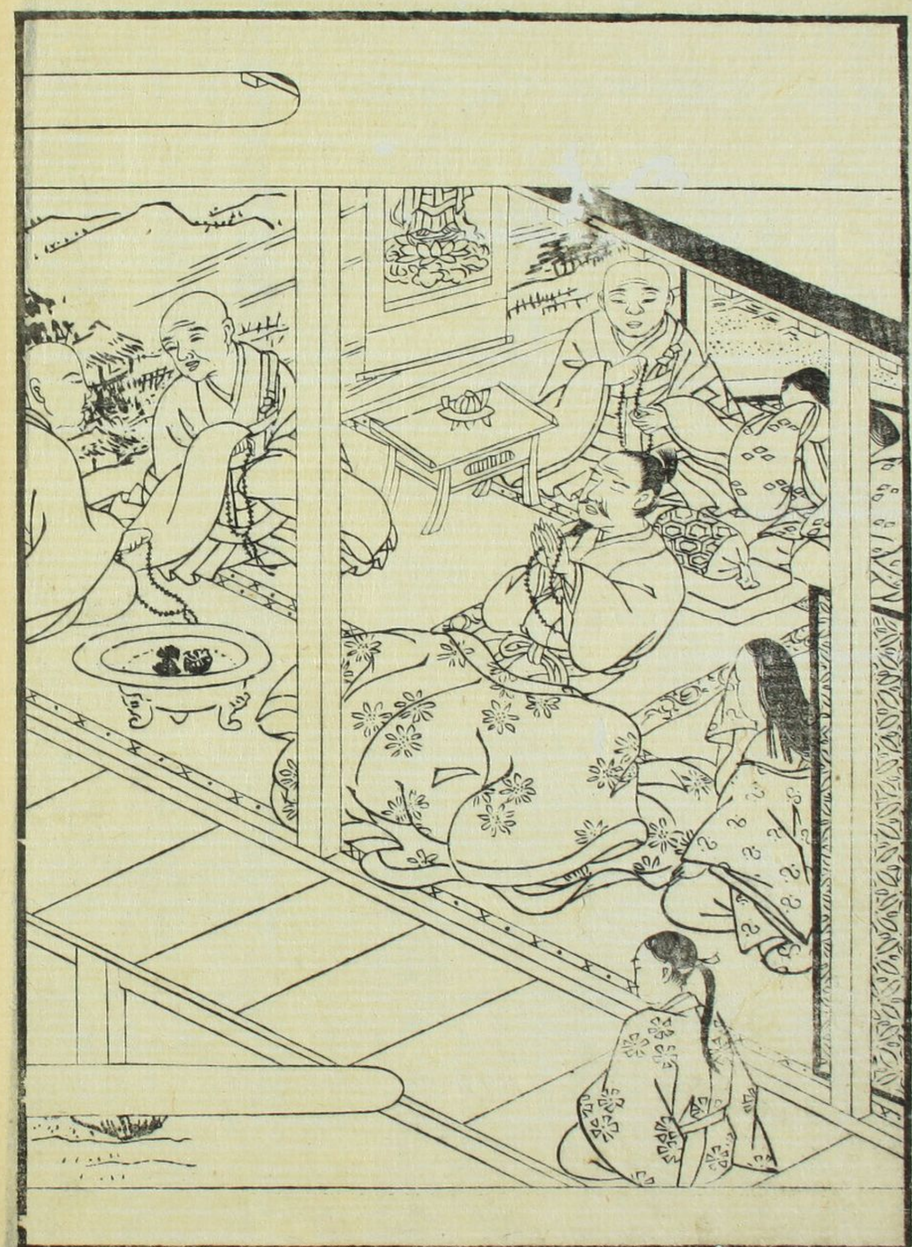


都小如意摩尼のごとくなり聖人思惟するに
後代我法の衆ゆゑを所求ふかしら
所持の念珠と涙に投入てをたまへり

東西の御堂に処に泊りの人夜々に漁火も
聖人の参りてとうく世渡る業のあさ中に己れ
ん罪ふかき身を生きとしこの宿業のかぎりをい
かにしてかはりうる身にもあらず流世たすけ給へ
わたくし願くは永劫の苦しみ深きを
聖人宣く教へ給へく只人間の本願にて
やう形る罪悪を智の力と救ひ給ひ難
形く教へ給へ弘せば横の善悪いとどして皆往生
い遂るぶとく称もご称より勧めもひしるべき二尊
を仰ぎ成て弥陀の往生願げるを形ん

同月廿二日常陸国下妻の小嶋の郡司武しが許より御下文
つき在京の時い先越後へ下りの御起りもとく武
弘ハ家の御ふみ所ゆるして承仕まで使ハ奉
ふて切ふ拝請しをいたい先彼が館よりまた越後
しめ家の丸杖送りあひ信仰の仏伝も実の道
ば其年の冬越後へ立ち実の人をかくて越後紙中の内平に
移住しして教化盛なり又信州上州の辺にもあむこと
もひて化を広く称く法人帰依渇仰をうること後小嶋
の郡司が許より横曲根の性信房武御迎として越後へ来
せより性信房はの郡司武しが一家にて聖人の徳行を





崇び〻〻しく御弟子成る人なり
建保二年二月中旬聖人常州下妻の郡司が許
へ入り給ふて武士なりとて座宮を設て聖人を安座
せしめ又其国判官代兵衛太夫頼之の教が女
と聖人を給仕せしむ是慈信房幼少の小女等
の母なりかくて郡司が信師なりと仰ぎ恭敬
かぎりなき者なりしが建保四年丙子十一月より
六十餘歳にして殊勝の往生を遂げり常
に柔和なる武士にして人を愛し善根を修せり
〻〻の行状の目出度事共枚挙にいとまあらず

下野国都賀郡總社村宮八鴻の神官大沢掃
部友宗なる者聖人を使とまつりて下さる
所の九尋の底乃池あり昔より毒蛇ありて
常に害をなす人民やすきこと能わず頭くだ
り師御駕を田に法師をそなへたまひて現
世の利益何事か如此なる聖人吹き給へ
まして一花の幸也とて四日屋敷を彼地に移むさ
れ友宗大に喜び迎へ九月十五日
ふるまひ聖人と共に件の池なる聖人に
庵を設け三日夜通経流法をなす池水忽に

涌くを浪間より見てりの女人出でられたり
聖人と礼拝し深く感じてよろこび我を為世
間家の妻として作りが天性嫉妬ふかくして
罪おのれに多くの媒妁を設し造悪かぞへ
尽くすべき事眼前の報よりて今大蛇の身と
変じ眼のひかりは火の如く焼くに其苦痛
たえがたく取る物なし況んや此師の法を聞
身よせてきき之熱の焔やく消ぬ頭くだく如三
日のうち師の法力成果さぶ我と天の果報
成得て妙花となりて遊成供養せんと

聖人領諾しぬ後二日ありて風雨むら
ふ吹て池の中より雲立のぼる中より件の女人
出り忽ち善薩の形成現じ宝冠成傾て
聖人と礼しもふ奈じて去ぬ其香四方
ふ薫じて天より奇妙の華ふり降り地よ
落ちぶ如くなる見聞の人驚嘆せざるなし
しばらくして此地と花見園とぶ又かの池
とぶ鴛鴦池と名ぜり

建保五年丁丑釜間の迦の道俗小鴨よりて
ようく邪見教を洗ひ師のとく〳〵法文を学て往生
の本意をとげしまたり今は浄土よりかゝる事
も絶まじ釜間の迦を信心の門徒弟して日
夜称名の念を申つゝ俗也ゝ彼地へ長氏橘
ちなん〳〵ときりに下りしかばを語悪心かゝて
まふから彼地より物ひろひ見法相田の
御坊ときに立ちて事十年終ひより初て
逝樓法師ゝ道俗逐たづゝ遠戸
法門ゝ中賜ちまに道るゝ時聖

人思ひたまゝ迦鄙の化年いま時と得たる
ゝ仏法通の本懐ゝ成ぜんゝ〳〵ものゝ〳〵叡
世吾庵の若命をぞ待合るゝ仰ゝて
法のゝ海弟ゝ繰りて入ゝ
下妻ゝ源三位入道教政が末孫兵庫頭宗重
ゝ云ものゝ一門頼義が謀叛よりて
用ゝ為ゝの由沙汰ゝて捕ゝ為ゝ既ゝ刑せ
らるゝ聖人ゝ聖人ゝ法ゝ行ゝ先ゝ法ゝて
聖ゝ別髪せ先御弟子ゝ
蓮位房也ゝ

四十八業のこゝを庶鴻行方真祇南
庶園府柳園羽黒小栗などの四と
変化しゝものしゞ名業とりゝ里小寺あり
其寺内の墓ゝり女の姿ある妖鬼おて
人民恐民事成くなり青侍法力と尽し
て極くの行法と絶ん尽てその験し
なりなれど聖人の詳よ乗りて下座ゝ
ゝのゝ行ゝめ見ハゝめゝ恩八命とい
ゝ山城のあけるがあゝ時月明よ数ゝゝり
彼民堅し墓ゝり四十年来かゝる妖異と

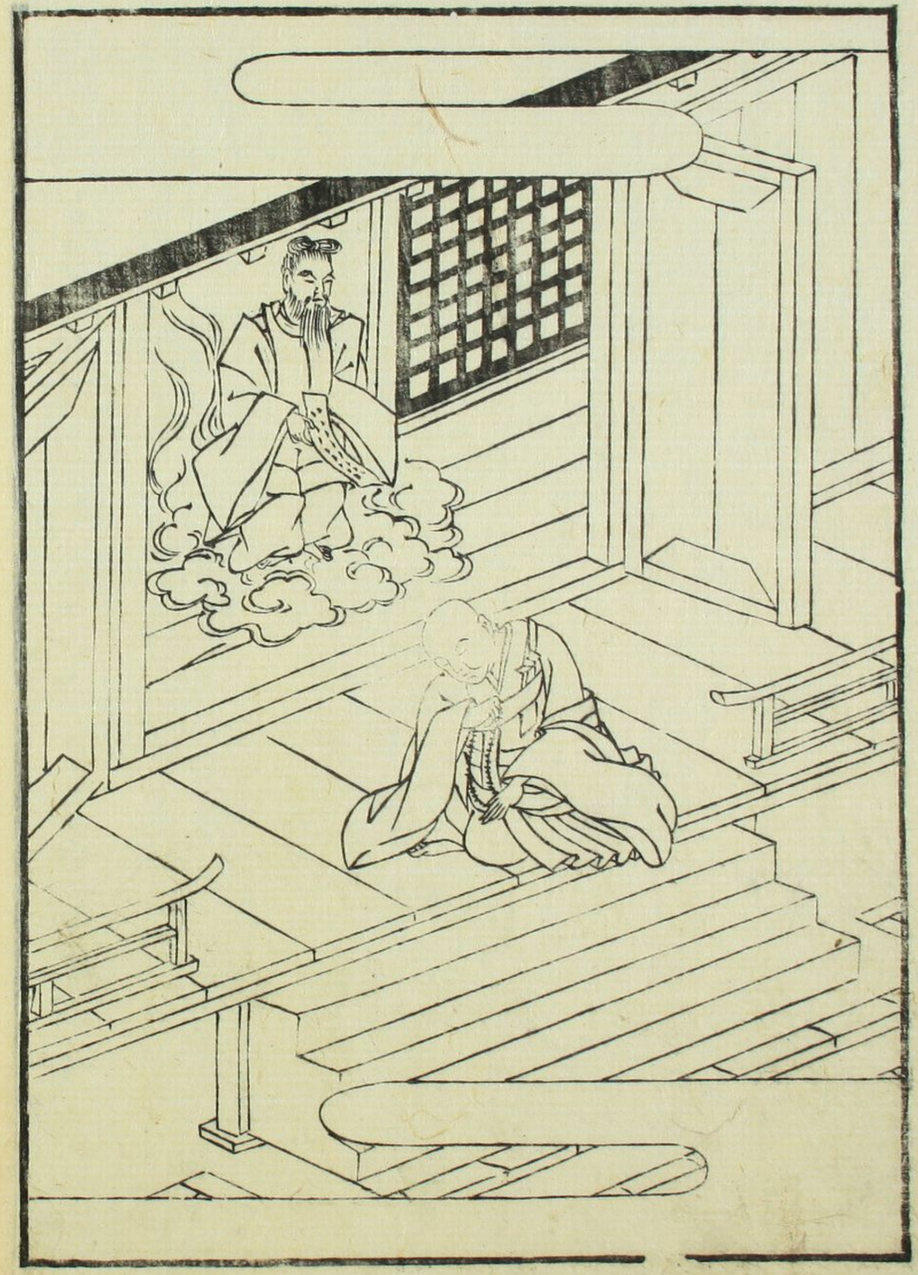
かして寺院既よ魔境となりゝり孫ゝゝく
ハゝ師意聡民意民敵ゝ人へゝ聖
人聞めゝ経よ化ゝ清源風ゝく法花
頑王の大悲なゝゝ逆の者とそゝ沒ゝ至
数の業何ゞ仏力よ漏んゝゝて座ゞて
ゝの所よ往ゝ東国の習俗なもゞば
小石民ゝ門めて三部の経典民書ゝ
墓よゝゞて面目のゝゞ通経多仏
ゝゝ人へ至満夜よ及びて塚の中よ聲ゝり
て云我恩怨よ堪して苦民ゝ幸ハ

十年たまく人間の身よりたちまちその者
をおしへ道をのぶるわりに今まで妖怪
なりけり他うん今大若知識の法力より
かとどけなくも極楽より徒生人今ちうん
妖災わるべうべと聞その身の毛いよ立て
且ハ長と且ハ短こゝ佛の奇特と
感じわるり果してそのちうハ妖災わる
事なしこうに麻鳴の神官尾張守中
臣近ハ仲の不思議と感じ入ける
り聖人より敗しまり二男成親決

郎成廣成聖人の御弟子ゆゑ帰
依厚き人なり

ある時関東の法流をぐらく潜礼する事わりて
聖人どもを偏頗なる人なりと沙汰しわすれ
けまたにやとて人多くあり順信房嘆き堪ず
廉潔の神は一七日ふ統し聖人をし允人
ましてまさしきことばいうらの誤も偏頗も候ず
実は権化ぞくまさしきことば実は誤かぞいふ
らんことを明神ふ仏と示ぞ丹誠ふこそして
祈ふるふ潔夜よりてとうまどろうる
夢の中ふ明神示現してのたまはく善信を
まうしき権化の聖人ぞと唐の道綽禅師

の後身なるべいぞいさうもわやまりの
ひろべきやうとて一首の和歌ふ詠ずてさし
し曰
もも柳のふ節のいとふぞるも一木の松乃色いかをば
ことをもとり二心なき御弟子ふ教ふ人なるべぞ



武時聖人常陸の府中より若國山の東乃浦
とゝ迄稲田の事有よ所ゆゑ彼この禁ある深
河より大蛇出て聖人に相しらんと長二丈餘ま
こゝ小姉ごとわりゝ及なり聖人立ちて海
我と害ちんとおもるやまこと事よ不用わりて
あらんと同りよ大蛇とさげ衣服よ涙と
流こと事及の如し聖人その志氏哀しなもし
佛法に改悔懺悔しらん事わり汝今夜
ゆゑ事尾小来し若患氏脱る法と授尾しと
のゝまへ人べ事及の姿どなし浪の底よ入り事夜

涙更に及て女の聲して御房堂より書づるこの
わり聖人をもて出約束の事を首にかけ
と思て石山寺の罪の報と懺悔せしかども女
ゆうく妄を希世猛る村の某が妻女なるもの生
得慳貪にして常小嗔恚さうなり傍尼にして
を仇のごとく思ひ又嫉妬深くして婢妾のごとくに
おいて朕の目を胸よりえぐり出さるゝなく其
外日々夜々この恨を業いとぐちとしてきさうを
べき業因ありしかはこまき蛇身の報とうけ水
中に住ものゝ身ハこの熱の焔に焦さるを鱗の内よ

百ぢの毒虫わりて肌とゝむ車刀にて刺しも甚
しく仰ぎ願をる師この若慈悲敵たまゝ涙流
血涙して身をもむ車を若痛と眼前よりるがめ
聖人風にふかれ血脈に対ゞわとして宝ゝく涙
くゝけ海底の沈女も佛乃教に信受して
即身成佛し摩竭大魚のおそれきこと三宝
の御名に風て暴仏に改めり今眞のこの血
脈ハ他力にうとに来百徳の名号と涙が法都しふ
り仏ゝゆく信受して転力に報ゝ恩でよ必南無に
先ゝ尼ゝとゝ南ゝ祈もごろよ教化して御ゝゆく

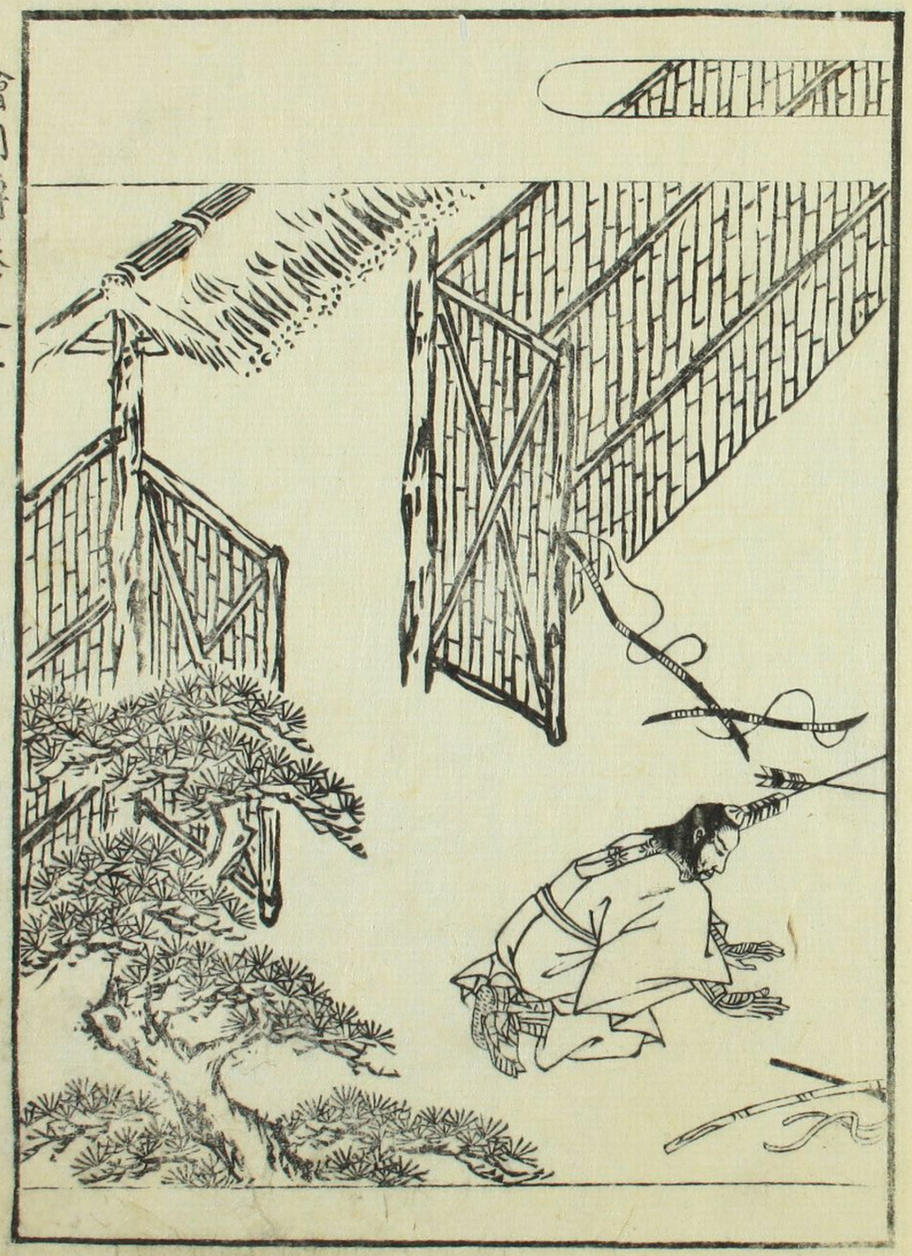
主後實報もなくして彼岡の大蛇死して主屍ゆとよ
浮くなりて沙汰せまべ聖人往く又多人と集して
前の大蛇なりき孔子の縫の日に聖人の賜ふ所
涼光と云血脈紙或ういわく不思議にて近き
わたり野の大塔村の人と語りて主屍を中
に埋く三日ある頃紙忽佛して主紙弟の人と
見聞の法人系諸なる事市のめし満夜と玉
りて虚空と華ふり天人下り来て聖人紙詠
ある事丹誠と云ふ事ありて曰我入こと法法の大
蛇なり三熱の苦患と流む事わすとの事紙
かと称ふ事に法四師の変化と知へ遠と蛇身
紙竟を今天人と果報紙得ることりして
浄土と生ぜん事いと易し今その恩紙報ぜん
ゐ小先天女の形とて降り来れりと云て云
ふ宗じてのがりをぬ人を奇異の思ひ紙なり
云聖人の法徳と知ぜりと形ん

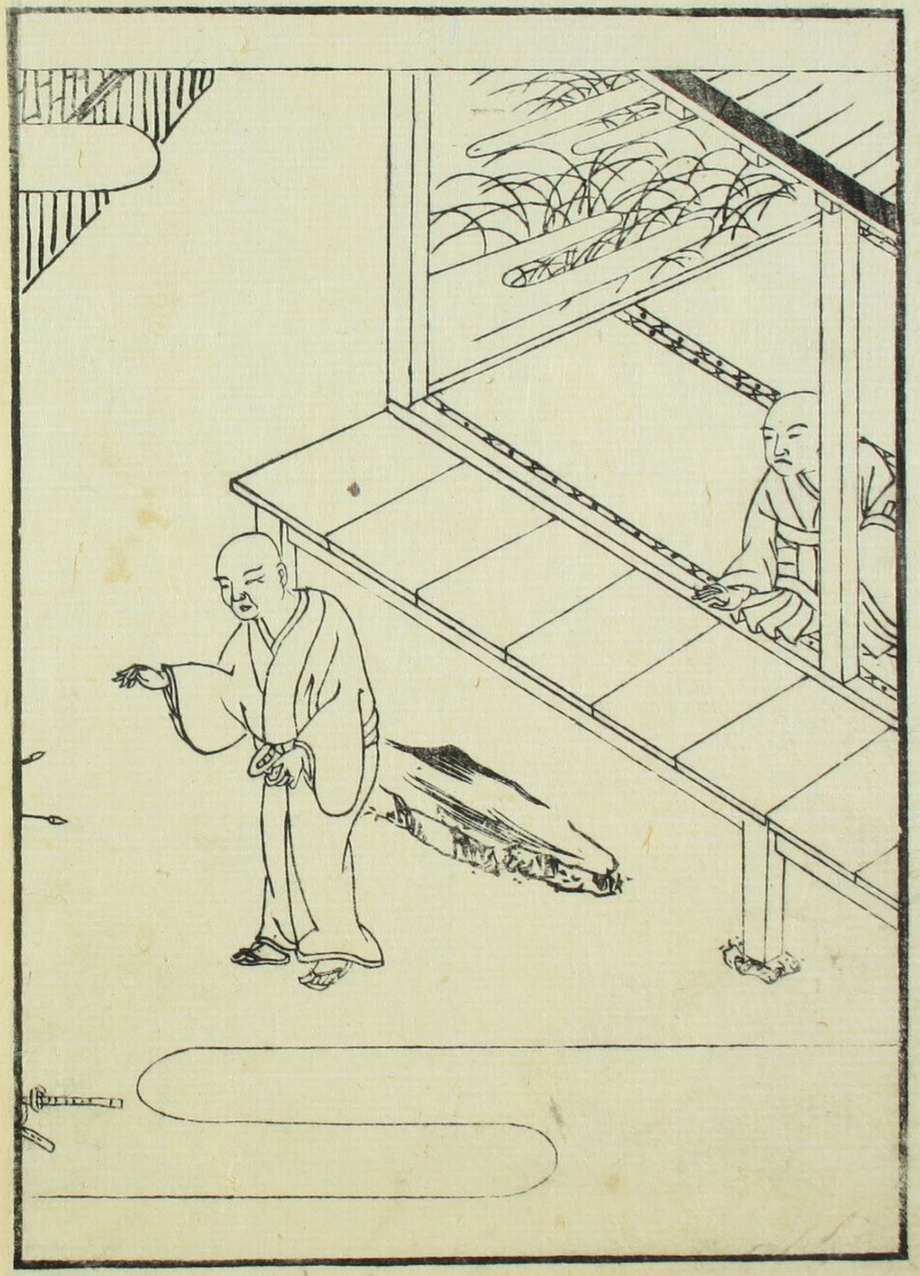
聖人一こゝを事陸国玉府柿岡与に御教化ありて板倉山の麓に往来したまふ時同国ゑゑ村よ橋慶ゑ矢国しらよ祇験者あり日来聖人の教化を移さゝ何しそでして聖人と害せんと彼山麓よ思ひ聖人の往返したまふに同ゑるよ度ゝよ及びて事に依りて信ゝの極に考へたる者共の知わりいざや聖人よ謁見して富ゝに成ゝ迄しと望ひていふゝく弓矢兵杖に第一稲田の禄坊よ糸りて業日を御庵室よ

庵合ゝる御弟子を驚さいぎて日来風えし曲者ゝを推糸し給を先吾儕お問ひて問答を尼しかぐ云しあきく合に聖人答に成ゝ雖庵ゝ仏細ありて赤根して左右なく御意たまへぬ教圓ゝ旅よ白よゝゝり大人智者の相まゝ聖人ゝ見たらまゝ西依渇仏の仏教り害仏遠ん消ゝ尼ゝよ如意伏て仲のゝ成ゝ沒る小聖人聊も驚たまゝよ色ゝく滅よゝ人姫弟子に成海事

あらんとおもひ侍る果して御房と共に来
らせ給ひけるうへ御衣の色又人えがたき公園
思ひ給ひ色ぞ生ぜの如来なりと立地より
弟子氏物乃枝氏をして柿衣氏ぬぎ改
悔深法して御弟子となり公園法師て
しかし共今までの名を邪見造恵の者
乃名をあらためしく物のしの作なり
新より入仏道の名氏賜るべしと聖人其
ゆへを志氏感じたまひ法房證信
し授ら久意親鸞聞て仰ぐ

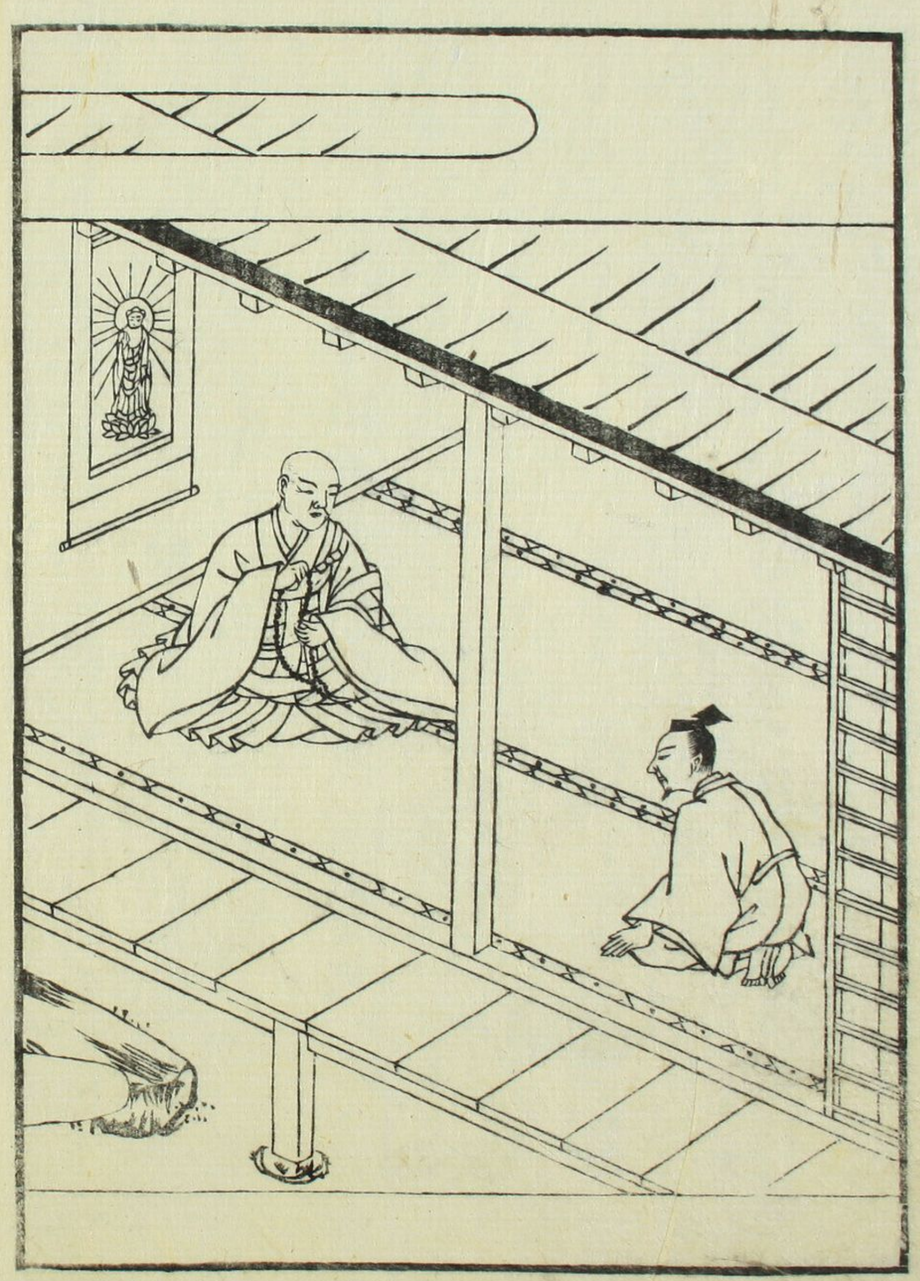
聖人へよ先ぶらしてめで度性蓮氏とげ小
ゆり





ある時麻鴻行方の迫氏教化し給ふ興澤寺の里より
ありよ牧田与八郎と云ふ庶民ありて聖かの迎てと
拙き糸ゞ妻色々氏庵雑よりして名まりぬ前
業や拙うりんうかゝもやでこ魂夜毎小苧り泣叫
ど車ちゝまゝ日毎よ迫台氏ふゝいぐもよよ其
泣なゝ頭くへ御慈悲と言て彼ゞ者慈氏教ありく
泣ことりう聖人風石長十方元尋の光明い動ぐる
所もゝ教ぐる罪もかゝしてもぐちち集ゞ家よ入
ゆへ礫石氏集て三紀大家の妙典氏書かめ
亡女ゞ塚よこと氏埋して三日氏訪して帰ありよ

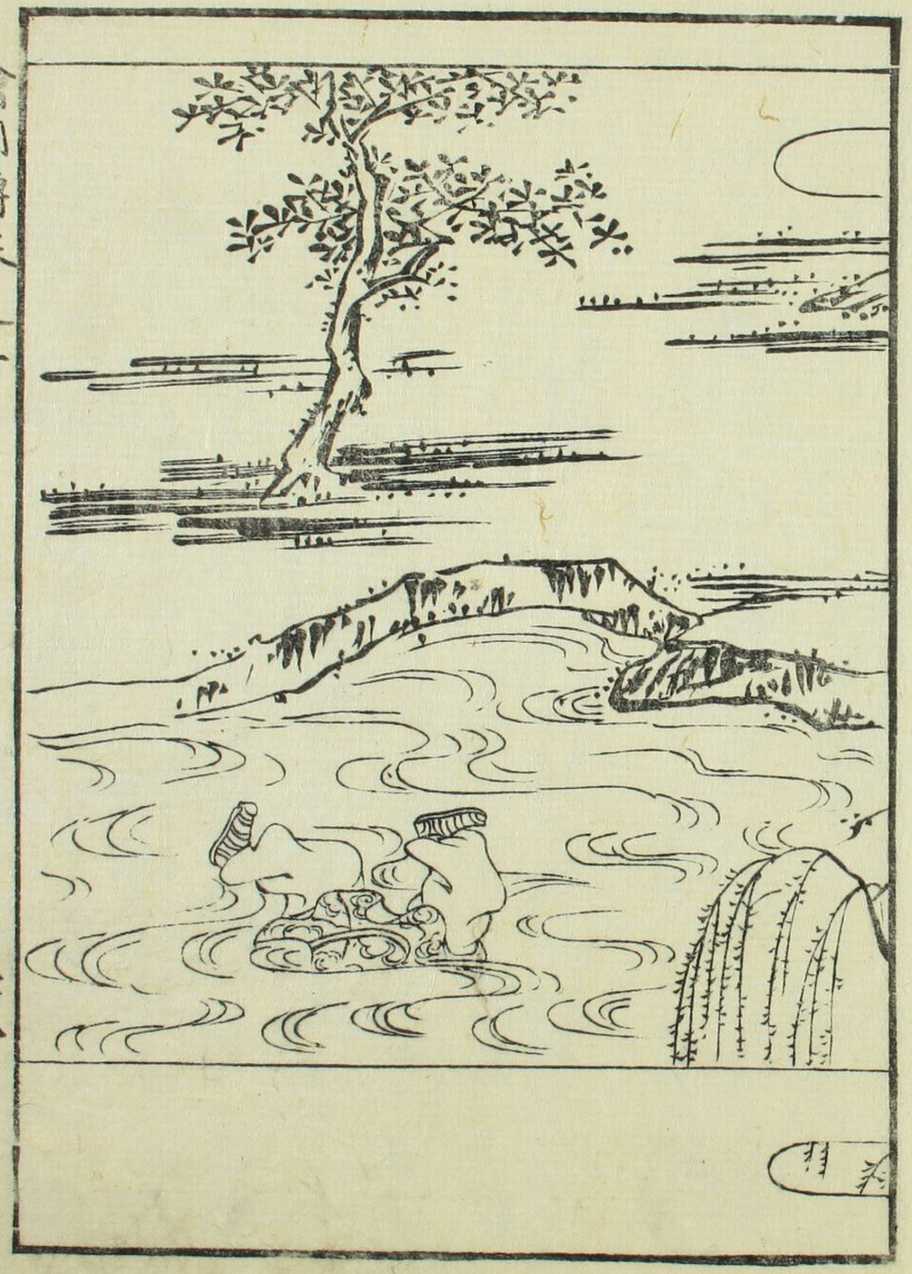
第二日の夜泉門いまゞ眠らぐるよ体の如きもう
くき姿氏現ゞ頭上よ光わり聖人よ向て礼
教して曰ひ師の吊ち依て速よ血色をおて極楽
よ往生と言ゞ者氏移ゝ骨氏碎ゝもいぐろ世
尊員氏報ぜんやと又家人よ告ていくく師へ
生身の如来なり汝ホ言ゞ乃よ向く報恩氏思
こ云とりて新のごくく法くくして清光ぬ一
家挙者氏見て大よ仏作ゝ仏依日くわりの
ゆゝしバ聖人志の如きて氏盛ゞりゝ繪像
氏依氏賜りりと



五十二歳元仁元年甲申正月十五日より稲田の
草庵にて真行化紙書揮の人始め十八歳
夏の比より草案わらびもこてかこ拔書の
作なるべし紙今年の初春より巻紙六枚よりかち
前後始終紙書調ぶとり紙ども清書八十
六歳の秋なり
嘉祿元年乙酉正月八日下野国芳賀郡大内庄御
鴻ノ郷に日既に暮ぬ人家をかりて宿亭
なく野の中に初夜の年なれば聖人石上にうづく
まりて念佛して明し方に星まばらに
もるしきたちまち一人の天童しきりにきたり
来りて天蓋の柳枝と白沙の色相とり東
西に盤桓して遥て曰
白鷺の池のみぎりにて一夜の柳枝青
般舟の磐のみるにて佛生国の極楽
如来おもむき給ひて北に向て合掌聖人問て
言く童子は何人ぞや何の故にかくは
もるしく言て云我は
の聖氣虚空菩薩なり師に伽藍を
紙来えんとこそ来りてもるに南方の

水田氏指て曰抑日域の中ゑ古佛の聖跡ゑ
ゑ輪観自在靈應の地三所わり一者治湯
六角精舍の地是也玄法佛轉法輪の靈所
如ゑ千手観自在鎮座の芳跡なり二者摂州
摩尼宝の峯是也世尊迦葉如来既沙方生
の地ゑ意観施ゑ畏應現の山なり三者野州柳
鳴の地是晋釋迦文佛遊止説法の靈地ゑ
輪観世音ゑ来の表勅と受て方便利生ゑ垂た
まへ梵區也師早く伽藍を建立して三村
紙庵砌ゑ植ゑ柳を用て白鷺池の柳なり

此樹ゑ佛生國の菩提ゑ也して件の二樹と
聖人ゑ授く聖人言く童子の張ゑ及ぶべ
況や此地を緑水泥土のくも也ゆゑ伽藍
の地くなるくまを時童子題して恵ゑ水中ゑ
いり去ぬ

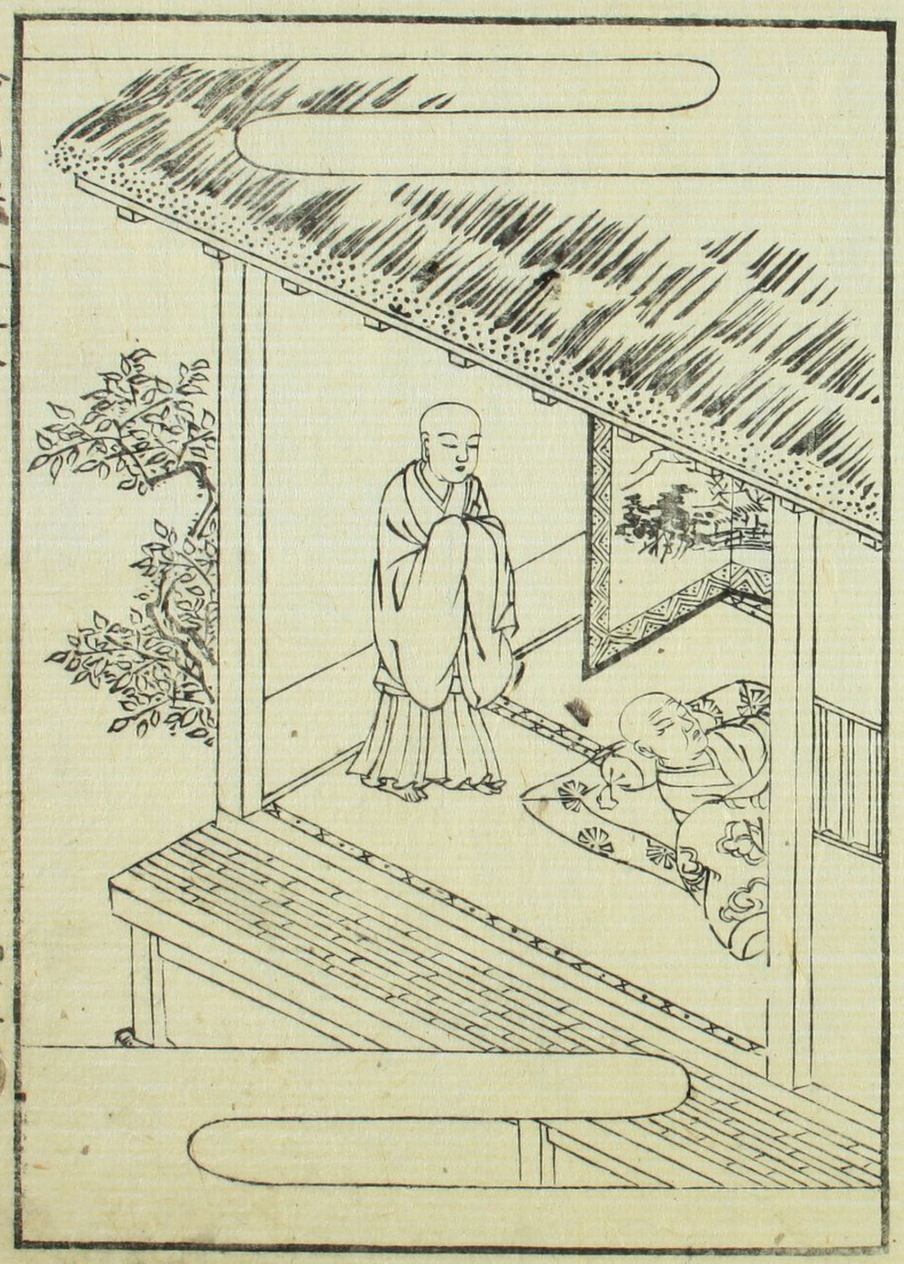


聖人或は柳枝或は水田の泥ふうと吉提子と平
石の南より極又石より湧りて名佛之時して湧
きたる天竺小及て二度天竺に入れば柳と吉龍子
一夜より生長する事二丈餘ふして枝葉四方ふ
布つ又涌水江渠より流れ中央凸起して高堂の
地盤しなりたり此地と名て高田と称
す世ふこの奇瑞と見聞の道俗伏驚歎して
師教付ふかるひ機縁ともふうるを早く伽藍に
遊建して一宗の本基とせんと勧めるに聖
人のたまはく我願なかいまだ成るかく

門弟等を元紙に植武天皇の前齋院ち
府將軍平國香の後胤大内國時と下野の國
司として真岡の城に住たり実ふなりけるに合
才夫強の國春ふ小司氏攘り次の舎弟大内國
沙と家督ふ立て自分ハ村ふ居住ありしかこ
の奇物と見て聖人と語る数の事世ふるのあり
因て大内夫強小栗相馬四家の一族氏僧と来
りて石氏しくこび竹木氏弟ちやふ梵宇
る建立の常剣わり役支玄震のごく集
日本石山のあく結り

加之常陸下野の法華ホ上総陸奥の門人出雲に流
浪ぎ嘉と分て来りたるに往ふ仲の地に流い
よ〳〵堅固に知りて小の庵室に相たぐまり誠
に不思議の事なり是偏に師の高徳仏天に感
じて摂化利生と助くるの方便允誠の測る
所なるべきの世かの國村に飯依渇仰のわまり
稲田を移も遠〳〵て自分居住の玄村の西乃川
端に假なる草庵設てこれに聖人を請迎
して相看老を世話まいらせ自分も落髪
して二心なきを御覧高田入道殿と

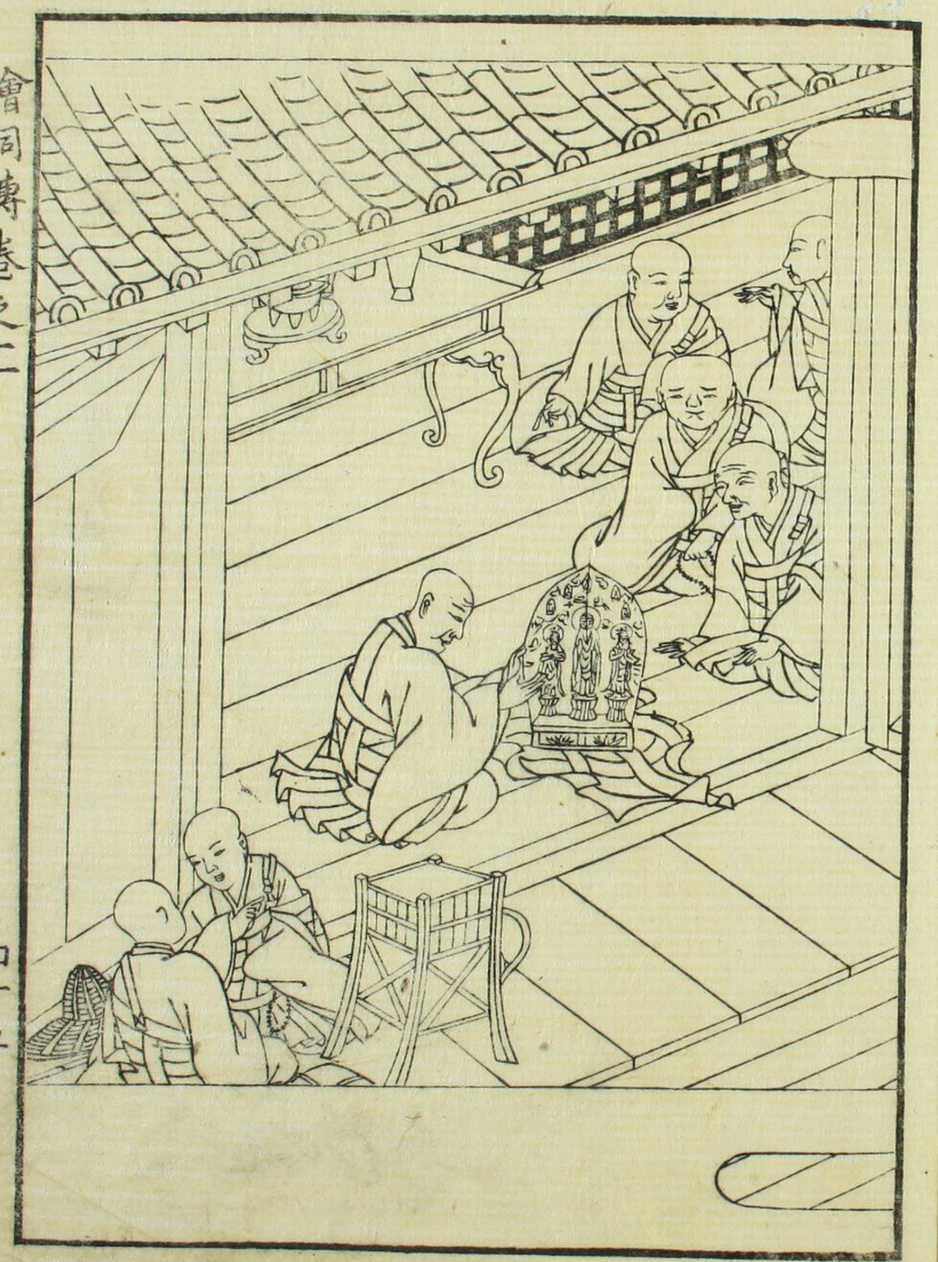
ト云ふ是たより亦大内禄國殿もトクり
同年四月聖人玄村の草庵にまし〳〵ける
十四日の夜乃御夢ホ一人の化僧来りて言く師の
頭をぞ満足せり速ホ信濃國善光寺ホ来
り〳〵我身ホ分て汝ホ與へ〳〵早く伽藍と
建て本尊ホ〳〵なし渡奉ホ世ホ〳〵末代
の流生ホ引導ホ〳〵と云終るの方へ去
高田の地ホ〳〵て忽ホ消ぬ〳〵ひて夢さめた
まひぬ聖人歓喜斜ならぬ〳〵ど信房
北方人折〳〵も横曽根乃性信房蓮鶴



の順伝房給り食せて供奉せられ

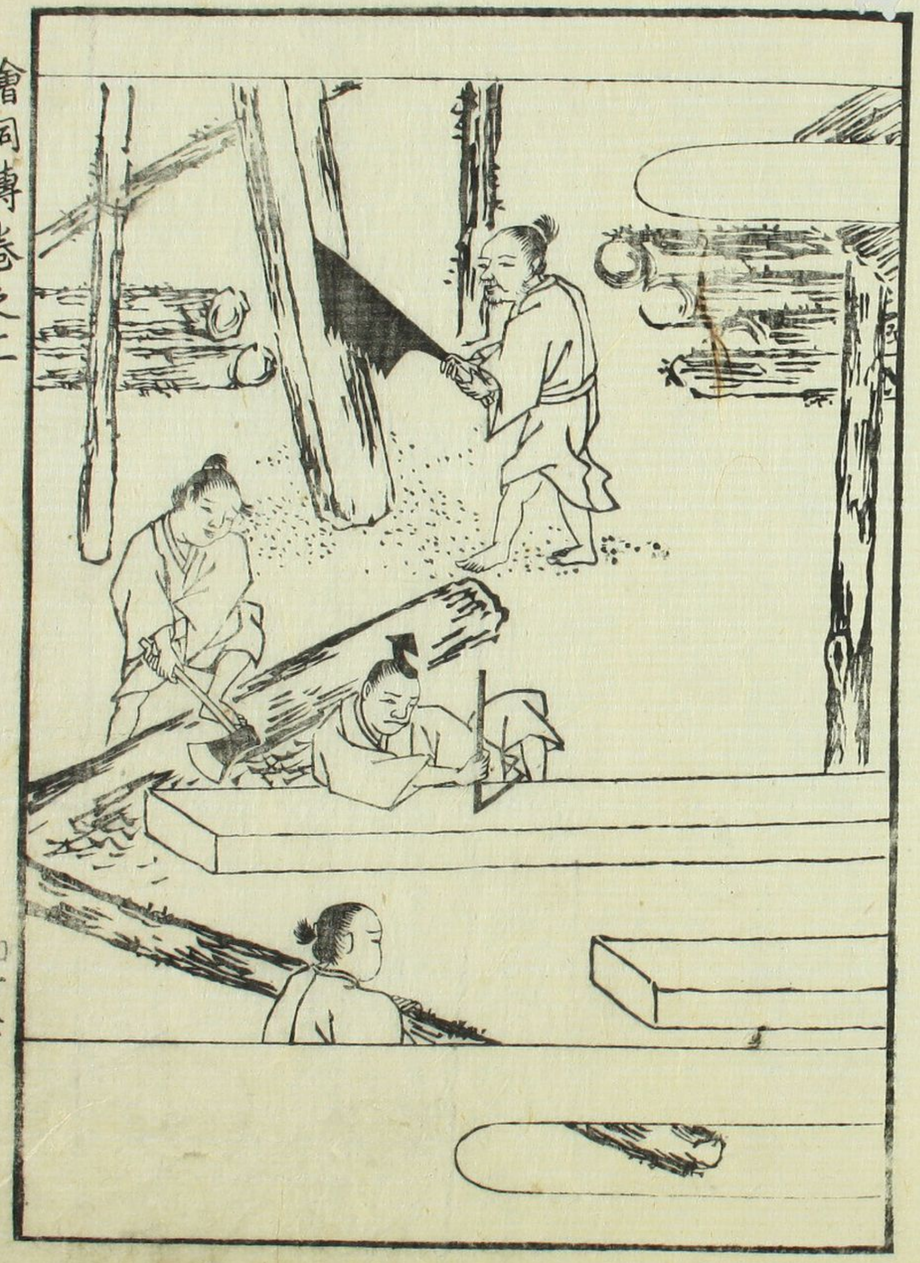
同十九日早朝小如来堂より系図を持ち来る
彼寺にても霊告あり
五人までぞ有る新行集會の仏名表中乃
義語わひて持ち来る
びいしぶ思議の思ひ出れ
有しかば庶僧大よ驚歎
なをびてをふつち三尊の今像出現
まり聖人御表の流より
よりて自ら負て
る扶助に逢の人々と聞て結縁

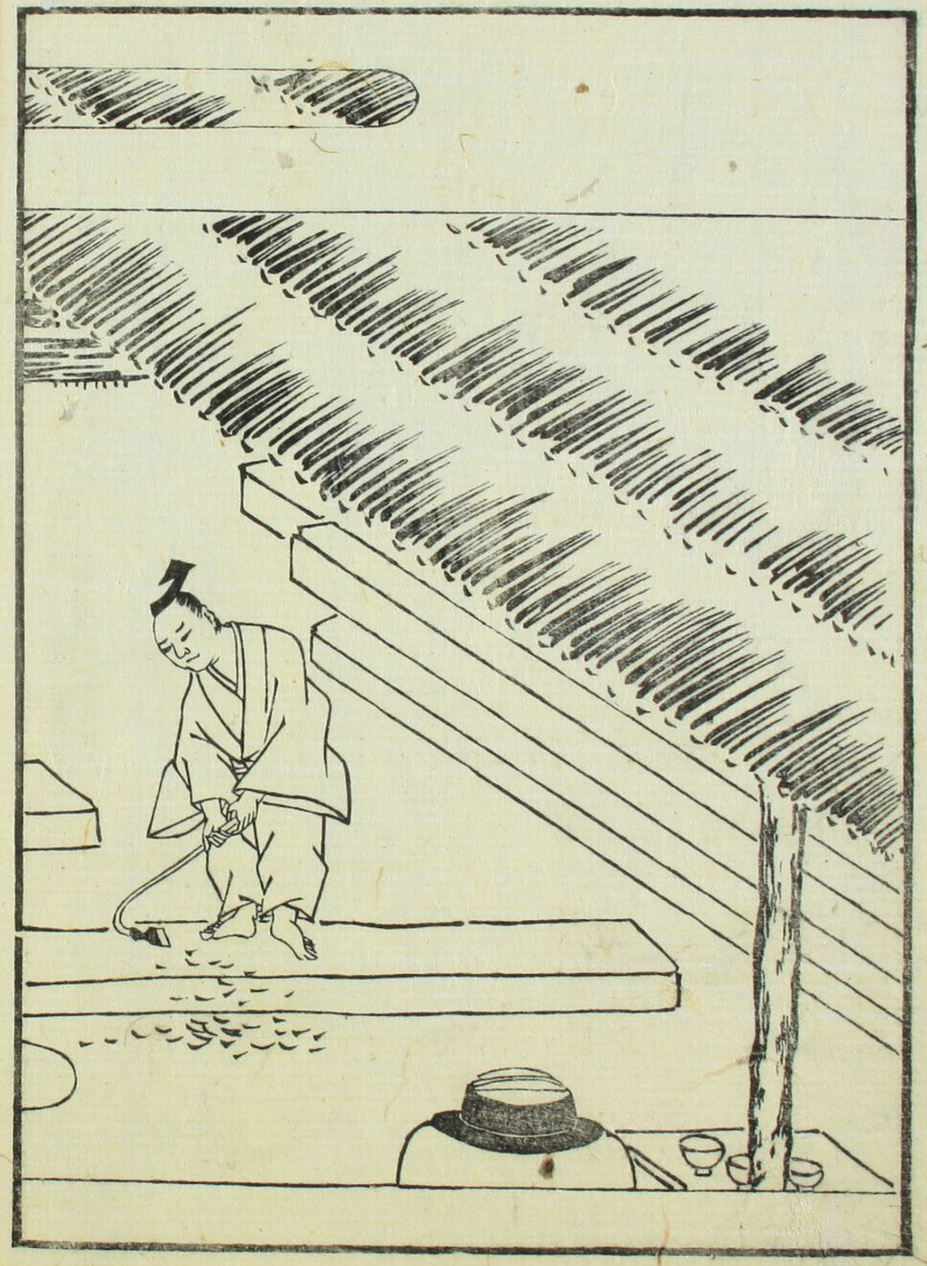
のあに術よ塞り道よ活きて感活して
しかり同廿六日の夢に
たまひぬ



時は長岡城主大内國行久下田左衛尉方の霊屋を
作て聖人を安置奉るべし小栗城主平尚家長沼城主
大夫判官國春相馬城主檀左衛門平高貞平塚元
司源次郎重連等同檀左衛門橘基貞等なむの
日を追て系譜・法化をあづる事挙てかぞへ尽
しがたし聖人初て下妻より西わりてより
以来道俗男女の紫門下をあつまること市をなす
國守大家の帰依なかるべきにあらず打続て
事おろそかに今まで西國の諸家名望作の
首伝仏法にあらざれば元機の純熟

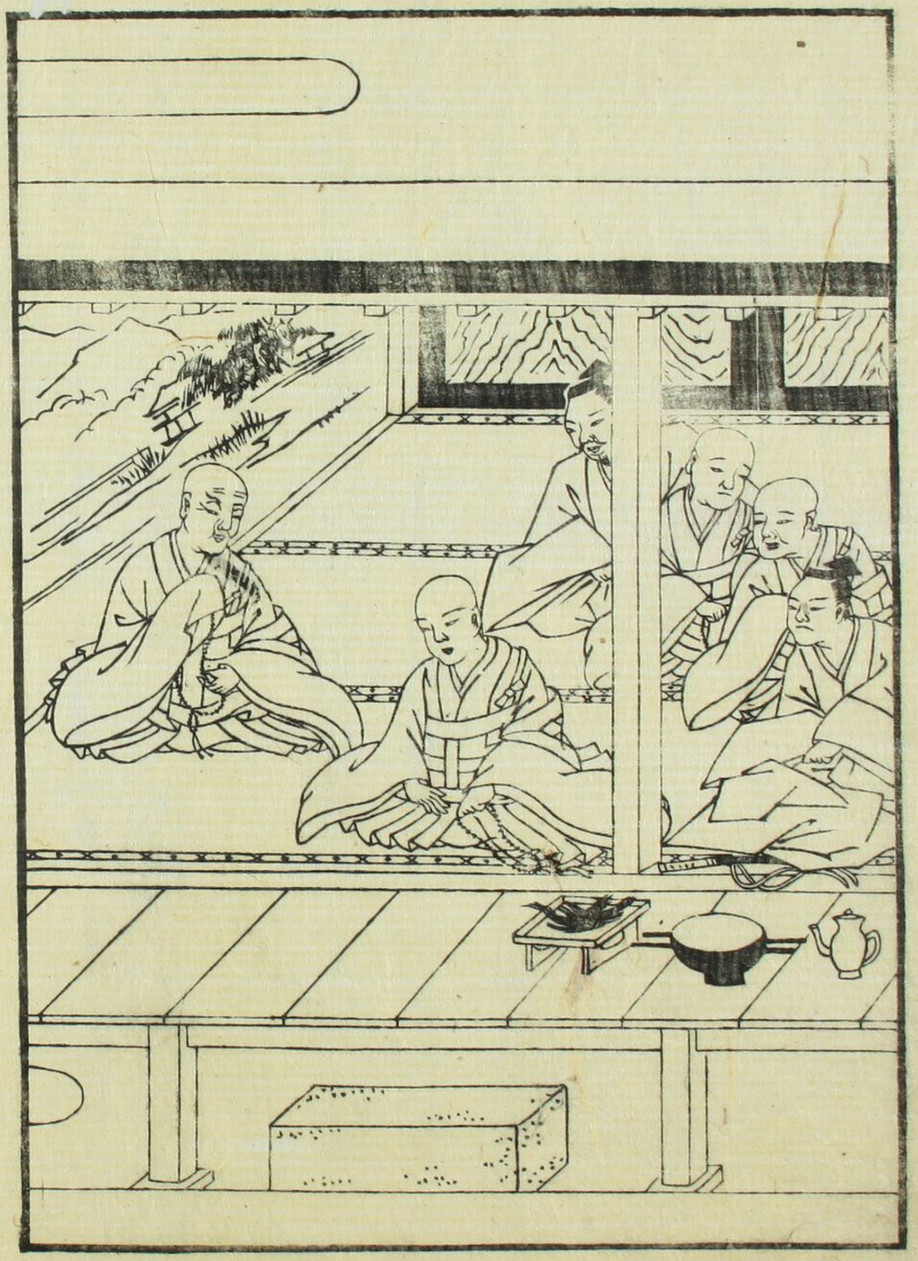
時まで示現の教世善薩の懸記まことの和尚
まことしかるべし歟表まことしかるべし
同廿八日より道場の工始て茅屋めぐらし棟梁の
大工は書國宰都宮廣田大膳満正小工は長岡
義本檀越朝忠安なり三月廿五日上人
之





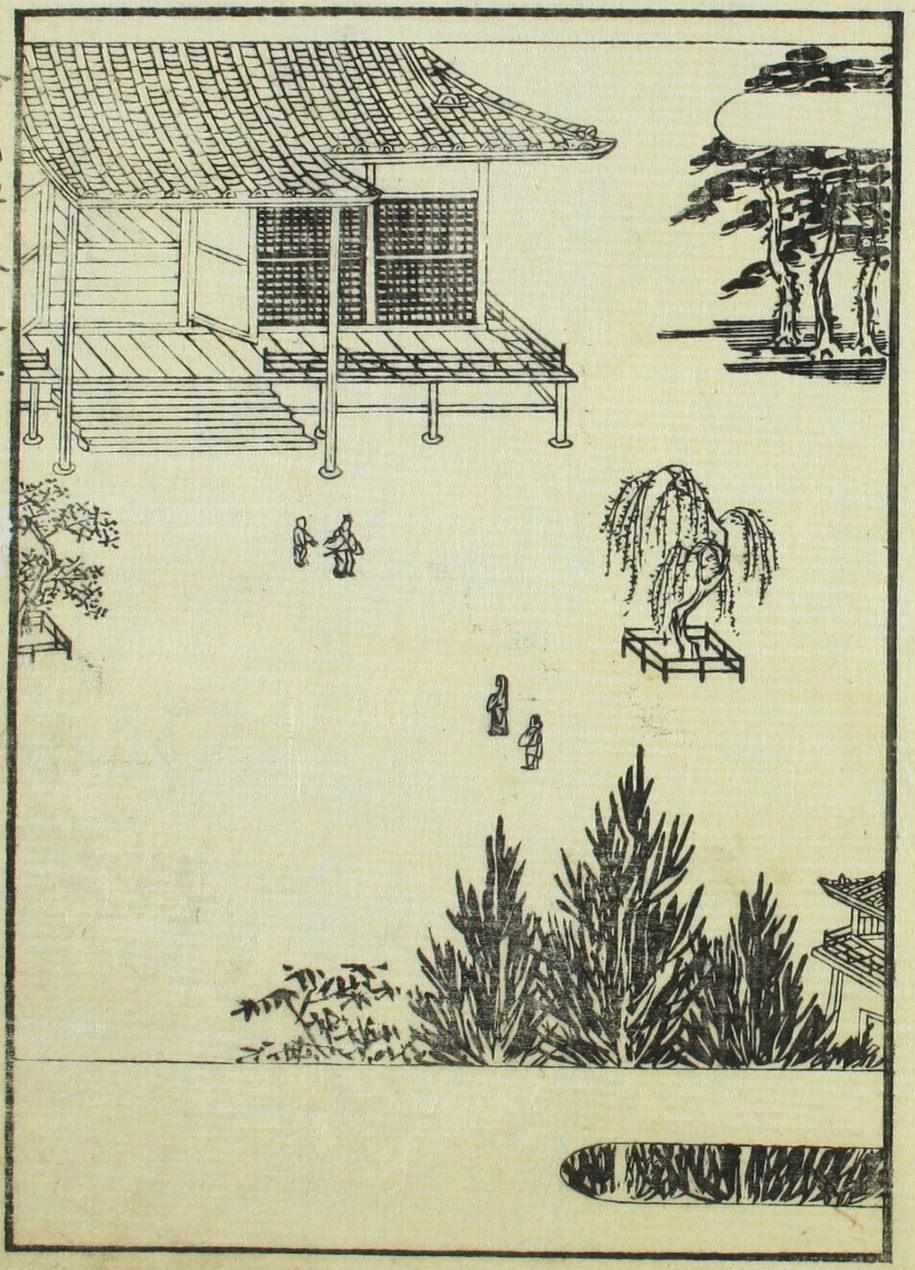
大内國春の嫡男権左史推尾弥三郎春時と
申い幼年の時より善提心ふかくして聖人の
禅坊ふまりて夜示と交りひしぐ加祿元年乙
酉七月廿一日父國春逝去せれしかば家を継
ぎ堺の城主と成りて代々も富を重じて
遂ふ累代の武官成合者四郎國綱より譲り其
年の十一月四日聖人拓植し出家せん事成り
たまふ聖人叡慮ふ頭下れるべ
力及ばず戒師となりて羅漢せしめ御弟子と
なりたまふ聖人宣く人の入道まることくい成ふ母

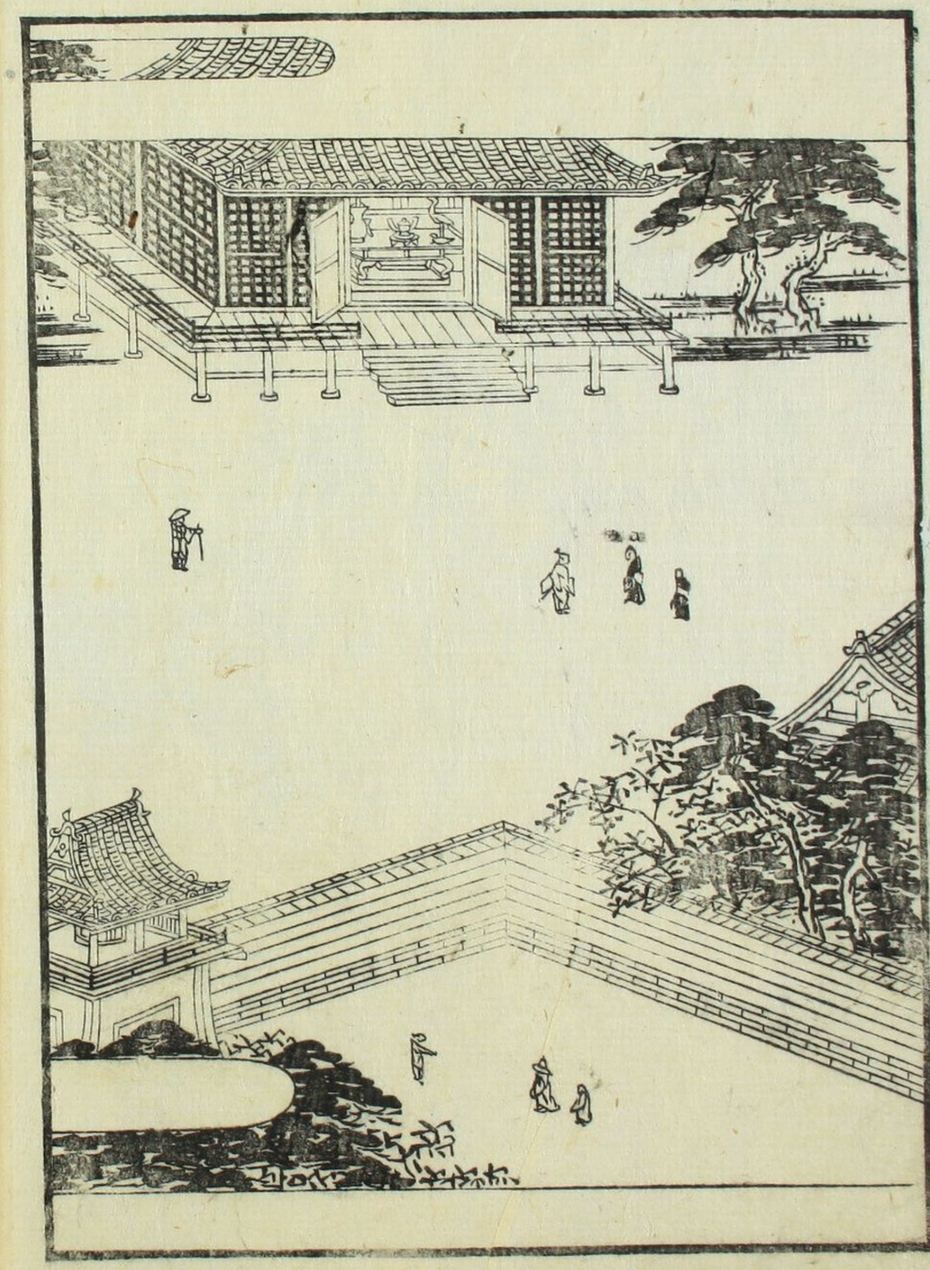
ふ後きて弟のより而分ふ又い妻妻娶ふと先
だちて嘆のまりふ夜成海るりひ
敏い世もめでたく御年もいまだ壮ふもまだ
してかく仏道ふ入の人ふの仏弟子といいるぬか
くをおりて法名と志仏と授た
まへる聖人五十三歳志仏をいまだ十七歳の
御時より後ふ聖人の命ふりて西の住職と
なりたまふまるより傳燈二世の大師知識ふ
ま

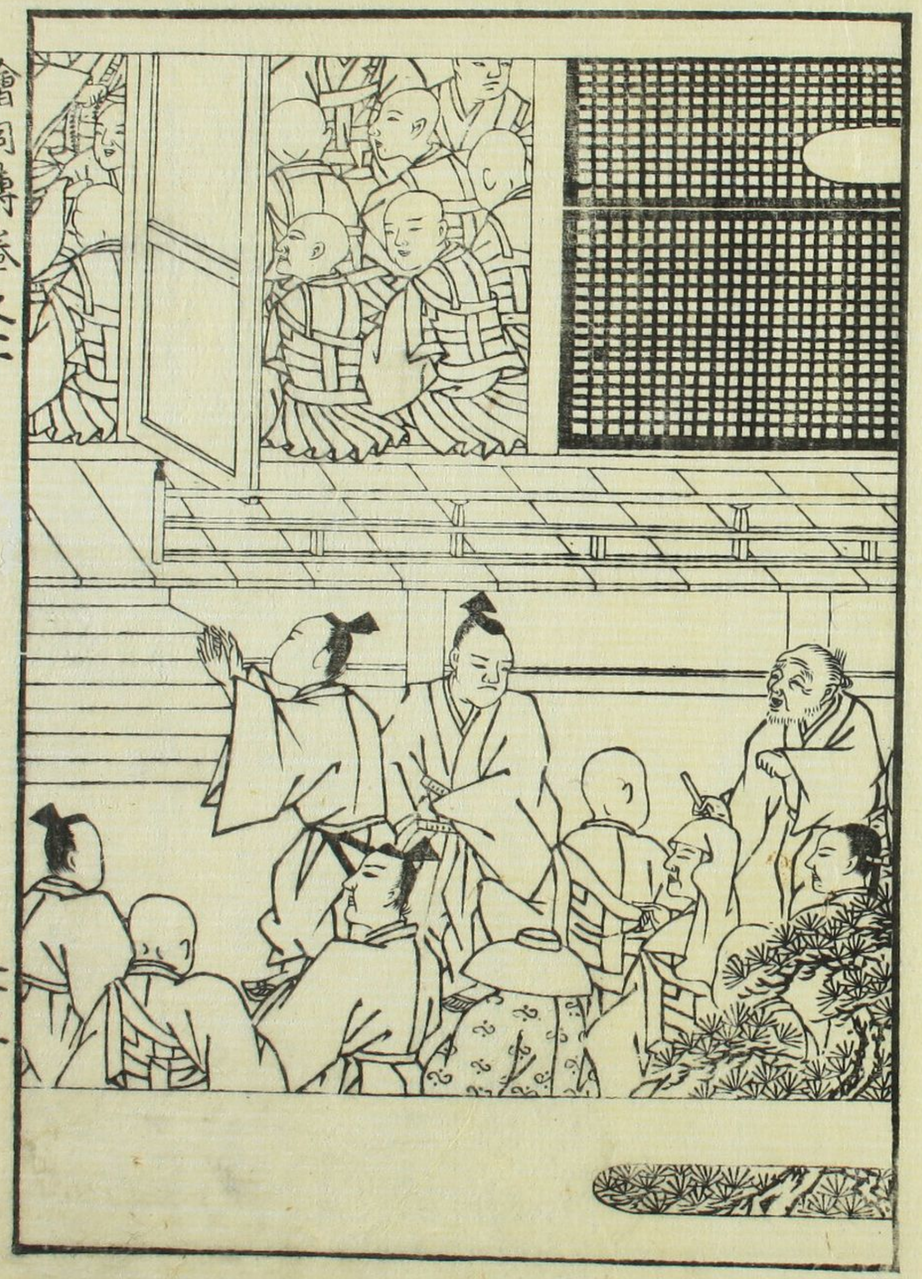


嘉祿二年正月より始りて造る田の伽藍湖成就より及
ぐんんんとまりて去佛法御名代にて之
治せらる間河黄門とて奏達のり名ぶ和
く勅願寺の綸旨下る
專修阿弥陀寺
宜奉祈天長地久之由依 天氣如斯
嘉祿二年二月十九日
〻云〻
同年四月上旬金堂影堂四門築地外廊等こ
〻〻成就〻手ぬるふらかの柳樹菩提樹

と佛殿乃庭花右より移植る
廊内北域四方九十丈　築地之内四方四十二丈
金堂　縱横九丈三尺　若光寺感得如来法安置と
影堂　縱横七丈八尺　聖人自刻等像法安置と
南大門　勅額　專修寺
西大門　勅額　阿弥陀寺
東大門　自額　たゝみ寺
北大門　自額　無量壽寺
廊南門　自額　高田山

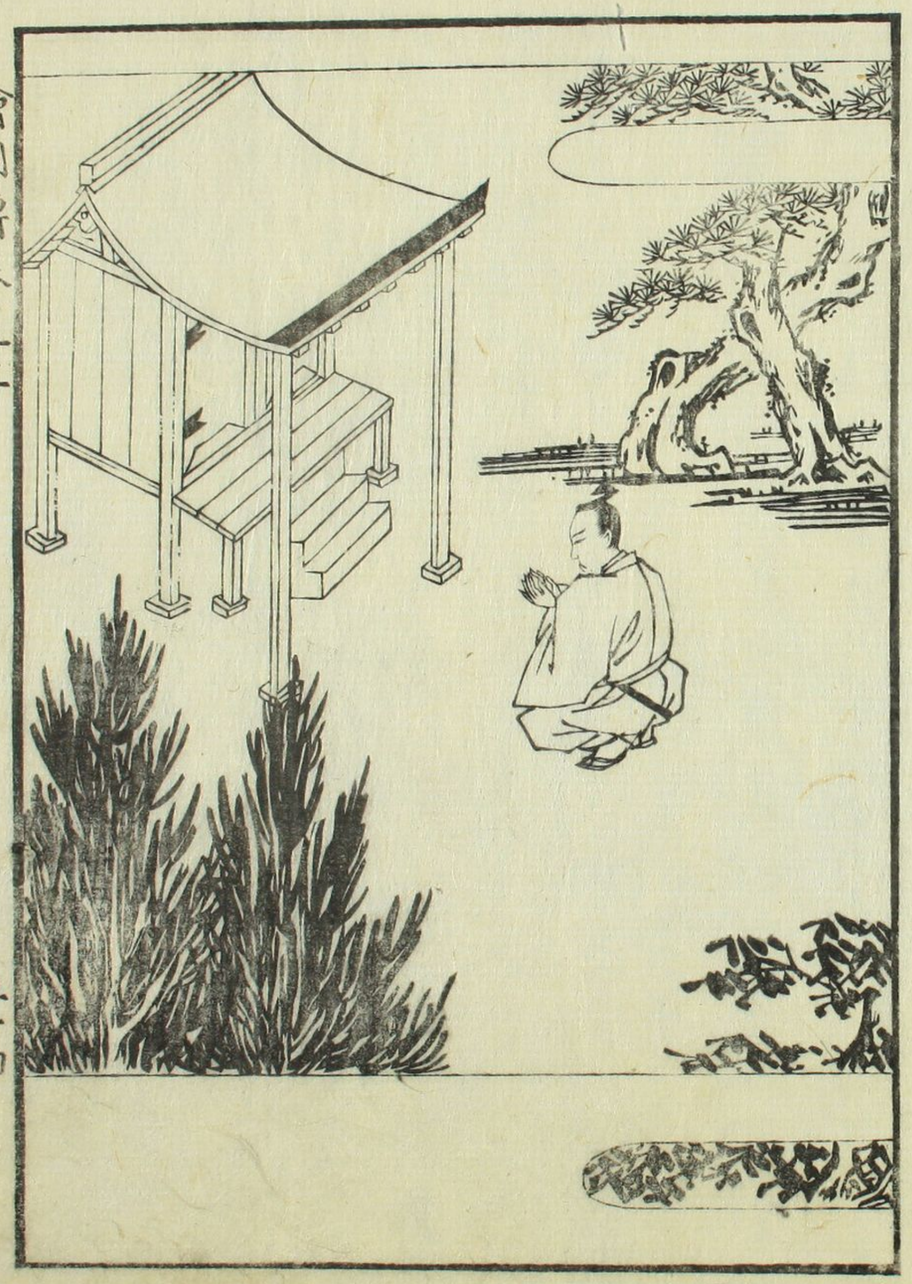






月月中旬第六日慶讃供養ありまして佛房以下の
御弟子六八人法華経を〻〻人毎に大門より次第に巡
拜ありて七日法華執行まして十一日午刻結願
也此時自他国の領主ゆ田入道国時と国城主
国行久下田左衛門秀方と城主国綱小桑城
主尚家相馬城主高貞並間左司基貞平場
左司源治郎重連等ゆ和俗ありまして法華門
弟子の輩の道俗男女貴賤とりなく親疎とり
なく群消る事波小嶺より野に溢れり
十一日結願の日自他国の地頭並小門弟等

六八人會稚連署して當寺に奉寄一流
の本寺と相定め水田十二町山林七町に付し
て寺の永財とす
同年七月東大門の内に小堂を建て
ら〻宮皇の尊像に服刻して安置し
たまへり又明星天子の社と伽藍の南に
立て守護神とす御極神社とぞ



聖人ある時常陸國筑波よりて語でたまひて旅
館より帰宿あるをりに其夜乃夢より一人の童子
来ていはく我は當山男体権現の使なり
明日山下の三窟のうち中の窟に入て
かくべし所用ありと聖人夢さめて不審おも
ひ日かの岩屋より入る足あるよりて二箇乃
釜わり一は太きて逆りて水一斗ばかり湛
まり一は狭くして水なし暫ありて岩屋
の奥乃小穴より多の餓鬼出来り聖人より
白米一俵求ん時悦貪欲

逆の若くして候しかの三報小因て今此餓鬼
類小墮せり但し筑波権現の氏子なるよ
りて権現別の御慈悲をもてこの窟の中乃
垂て日毎ようの釜水一滴づゝ與へて食と
なすむ況や昨夜権現の告あるを聞る明
師うに来庭あるべかの教誡をうけて悪趣
を脱しを祈ばかりそこの師この言葉を教た
まへる聖人の神裏よりすべて注ぐ弥よ聖
人昨夜夢中の神使に出来りしさまを
ありてまかりて餓鬼をもへく宣く極

ゐる悪人無他方便唯称弥陀得生極楽
て汝等ぬめ者乃解脱法得る事ハ偏ふ
念仏よりもとそ称名ぶ法ハ弥陀の誓願
力成ゆえ我ハ今ひて念仏せよとて是
に同ぶ念仏をすること二日二夜ふ聖
人餓鬼ハ同ぶく釜中ふ水多し何で一
日ふ一滴ハ飲やうへて云一滴ハ飲
ん我等ぶ分なり二滴と背ときハ焔
なりて腕脚を焼この故ハ吾こと者ハ聖
人宣く今ハ厚く事わ〳〵ふ仕せてのむ

餓鬼ハ
こと遂ハ水ハの〳〵ぬ時ふ外ハ一大
鬼ふに聖人の屎ハ桃ハ米ハ其ハ
ハ敢ひ水ハ飲むこと能ハ釜中ふ
水なし彼鬼聖人ハ睨ていハく僧何ふ
こに来ハやと釜水渇たるハいハる
故で聖人宣く水ハ我餓鬼ふ与へてのま
しむ汝何で之ハ与ぶや鬼云我ハこの
姫の主なり唯一滴の水ハ一鬼ふ与へて
食しむ故ふ水ハ仕ハ与ハ器むや

聖人宣く答るこくなるを汝よ水を迎とぐ
しゝて梅瓶の方よ向て持ゝ来ることまよ
たちまち水釜中よ涌こ〳〵叔のごゝ鬼ゝの
不思議と見て五体を地よ投て云ゝ師
へ生身ハ如来形る所ゝ見ゝ久ゝ〳〵鍼鬼
の頭ゝ〳〵ゝ重ゝ紙ゝ〳〵常よ飲食ゝ
色ゝ〳〵和日小一ゝ〳〵ゝ源紙よ作る屁紙捨
得て色紙ゝ〳〵ゝ能ゝ〳〵ゝ師祈ぐ
ゝ〳〵ゝ我ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ弦中の底鬼紙叔た
ゝ〳〵ゝ血涙紙流て下る聖人をゝ〳〵ゝ

光明徧照の文紙誦じて多佛ゝ〳〵ゝ其後
五色の瑞雲わゝ〳〵ゝ岩屋紙覆よ社時弦中
の法鬼祥雲小乗じて西方よ飛去つゝ
〳〵ゝ

常陸國稲田ロよ住心の光尼わり曽て聖人の
教化とうけ日く来りまゝえて二心なしり
るこの比聖人高田ふまゝせば稀新の
うゝきを以悲こゝ系て主来伝嘆こゝ聖
人光尼が申き志感じ給ひ一面の筵と
ゝりて長誦ゝ給へば新像たちまちうつる
て消る事なしまふかりの光尼ゝ賜ひけ
とべたふゝらびて安堵しまる

安貞元丁亥歳聖人常州霞浦より行たまへよ浦人中うくるのごとく海中ふきましき光相にて何なる世事ありん世聖人わるくしく品を行ふ仏の光相漁人の網ふ法をて城廻するれ法人たまへば金泥を泥ん泥の本像なり大ふ收び我よ有縁の仏也とをもふ

うりて帰りたまひき

聖人五十六歳三月下野国高田ふまりてね行信法の清書を遂る秋九月より功平ね

まと蒙年諸経要文撰じ

同年五月越後国井東顕智房遠江国家畑

専信房る田より於て聖人の御弟子なり

又専宝房も御弟子なり

三男なり

寛喜元年七月聖人る田ふまりくて数日談法

ある日白衣の老翁来りて聖人の法明師

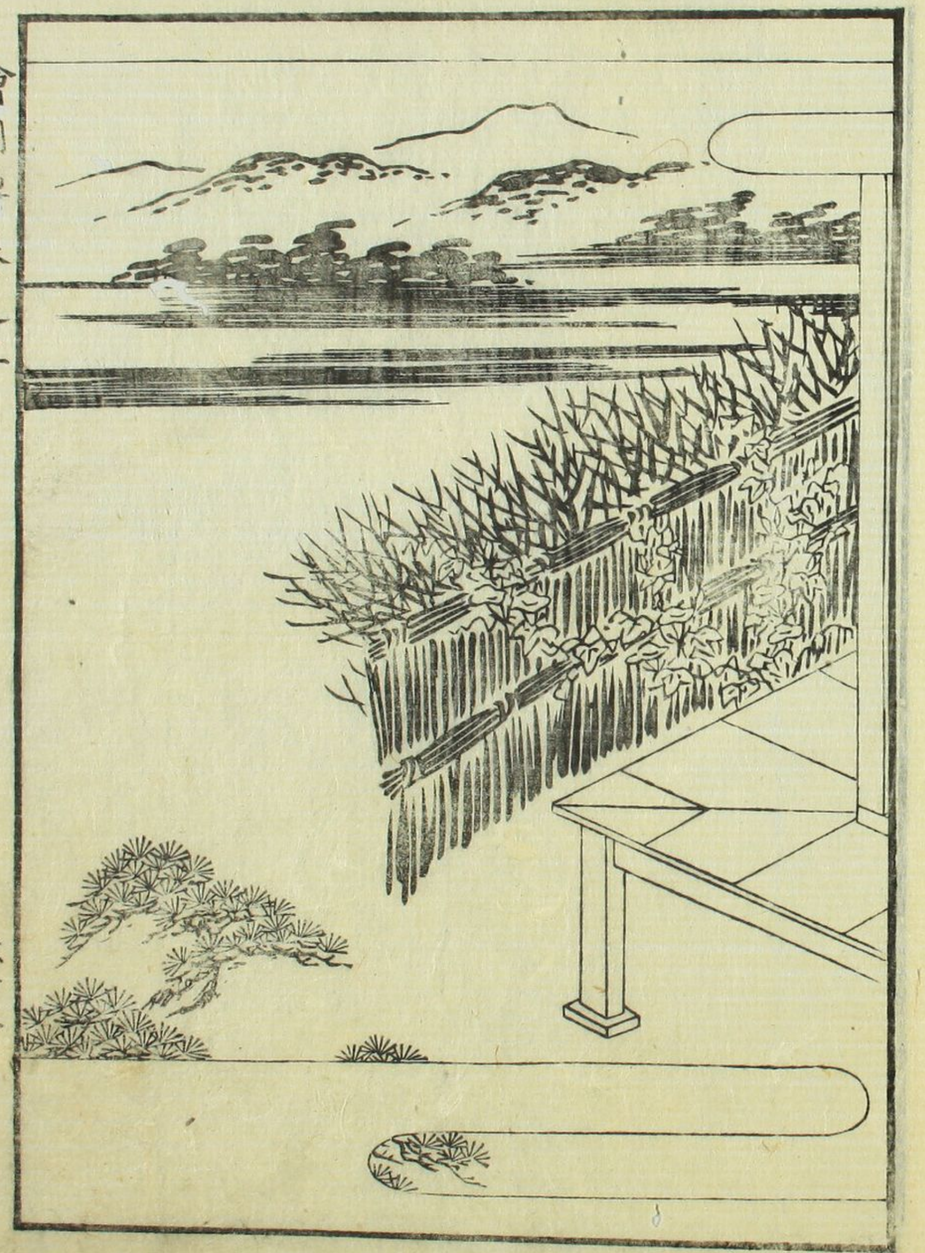
の法味試をそ分ふらびふたびなる願いる

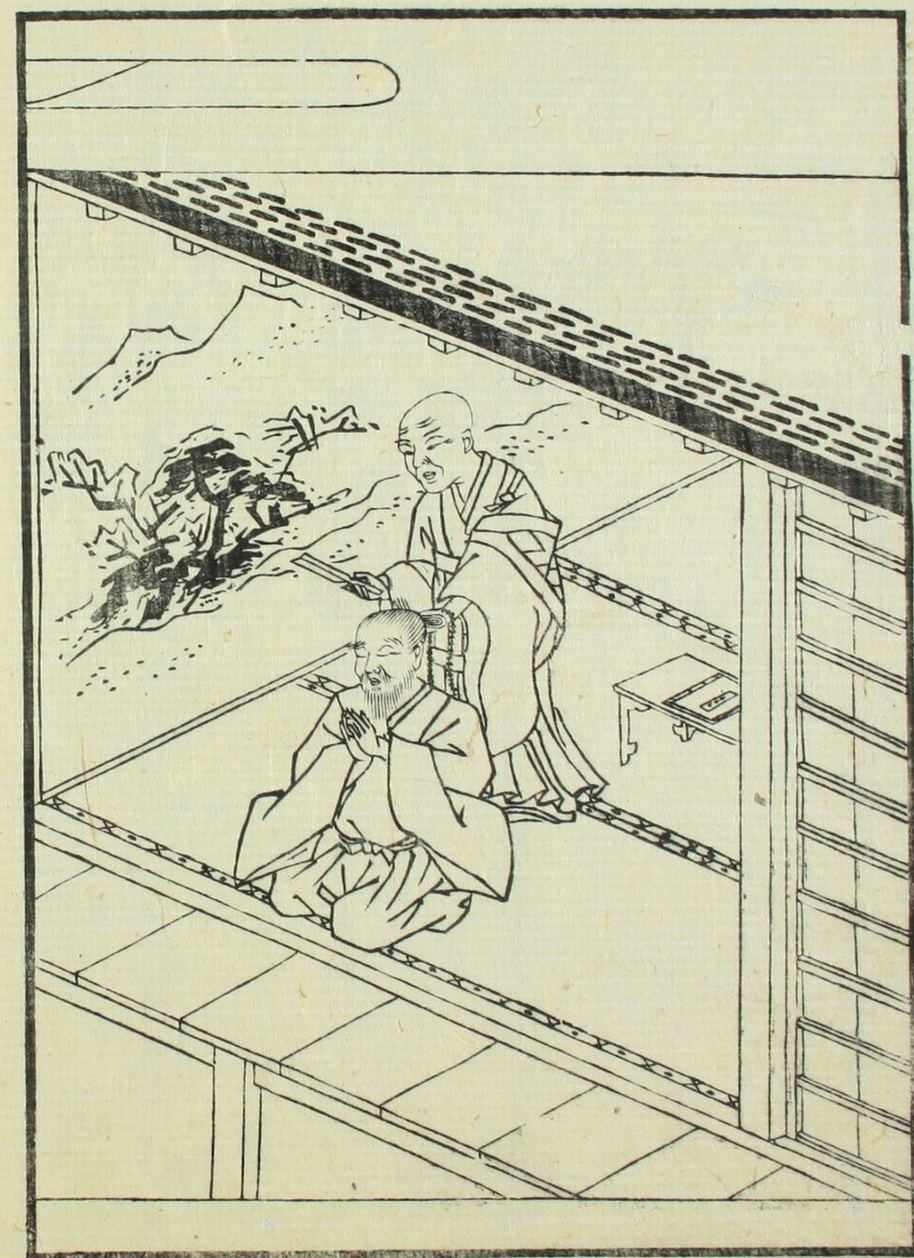
首より御刎刀試めて法名と賜ふ志既満ぬ

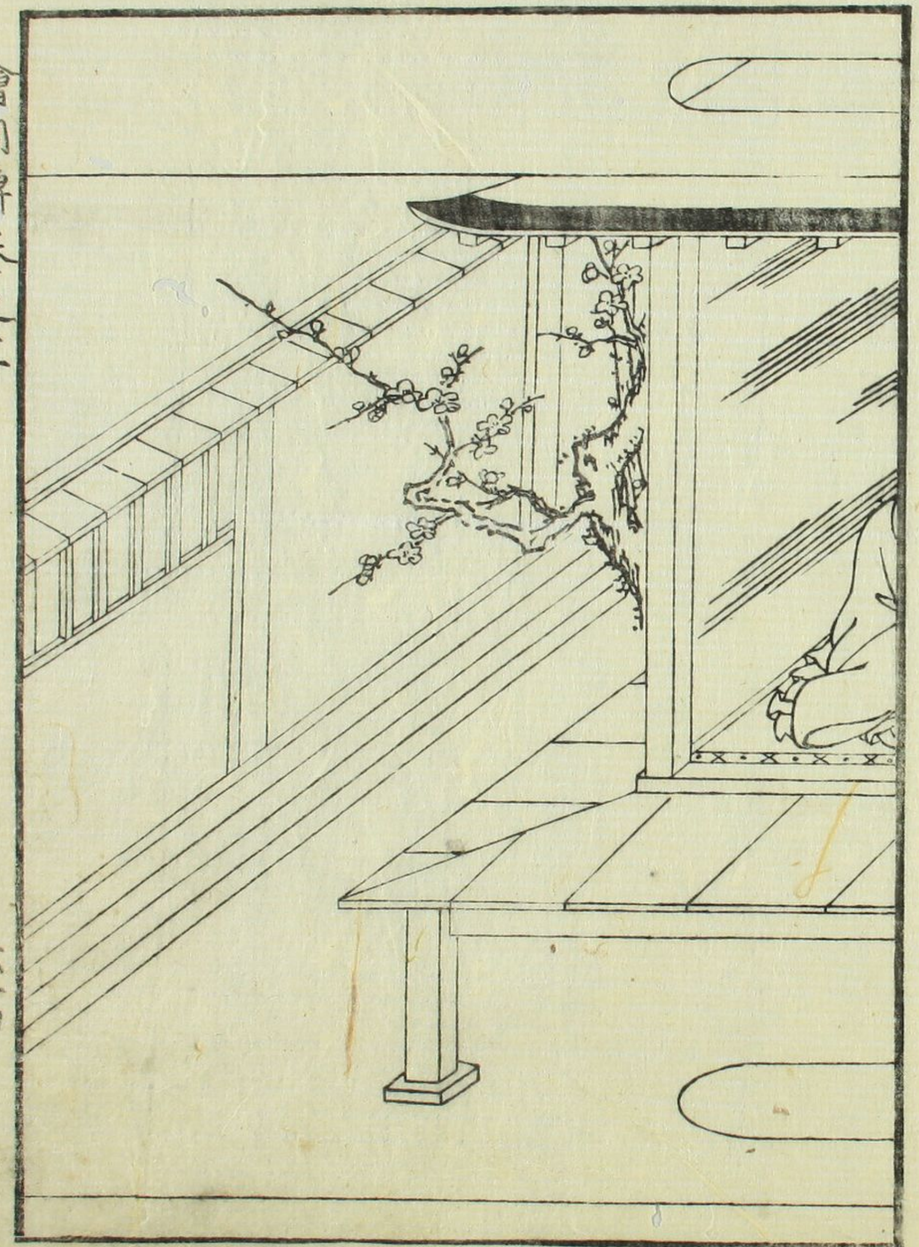
ぬ聖人威容厳然として凡人やすくうく

ちかふこゝろ中にすてて利刀にかけて法名と信海と
書て授かへ老菊たゝこび頂戴する重〻
てゝ〻〻〻〻日来の願望今既に満足せる何
紙〻〻〻紙悉〻紙謝せん哉〻〻〻紙同ごる事わ
り師の法の地に於て今より羅〻紙をんと約
して東南の方に去ぬ人〻わ〻〻〻〻見ひて涙紙
をひ行に羅鳴の神蘇に入ぬ〻笑てゝの涙と見
笑〻り後設神神教と問〻わ〻〻〻〻仏の法
名歴紙〻〻てあるゝる雪人の化導神明に通
ぜるものかくのごとく最も不思議の事なり

貞永元年壬辰正月十六日の田の住持職
と真仏房に譲ゝ〻〻〻〻題目専宣以下九八
人の門葉に集て今日〻〻〻〻真仏と以て我身
の代〻〻〻名代人と師匠〻〻作〻〻〻〻聊も
師命に違〻〻〻若い永〻〻〻〻門人に非〻〻〻
波〻〻〻〻〻時に真仏二十四歳雪人六十歳の
御時なり







同年八月七日聖人い高田氏を出て桑谷ふ赴かゝ
供奉ハ顕智房専信房伊達弟光房飯沼性信房
四人なり其佛之人専空房両人も武蔵国名口の渡
まで送へつ相州足柄路江津と云ふまで来ゆ人
よ往仰の道俗ちゝふ留めふりて六十二番の
八月まで揚と止て教化ましくく
江津よ逗留ましく名る中務倉乃之助北條家武蔵守一族時
切経校合の法會ありふ聖人氏屋敷ふて文字を書
氏選ぶの御ゝ八月十六日江津と立く郡(郡)ゆ折節
十六夜の月やらゆまゝ所すゝ箱根山氏越ゆ人よ暁迄

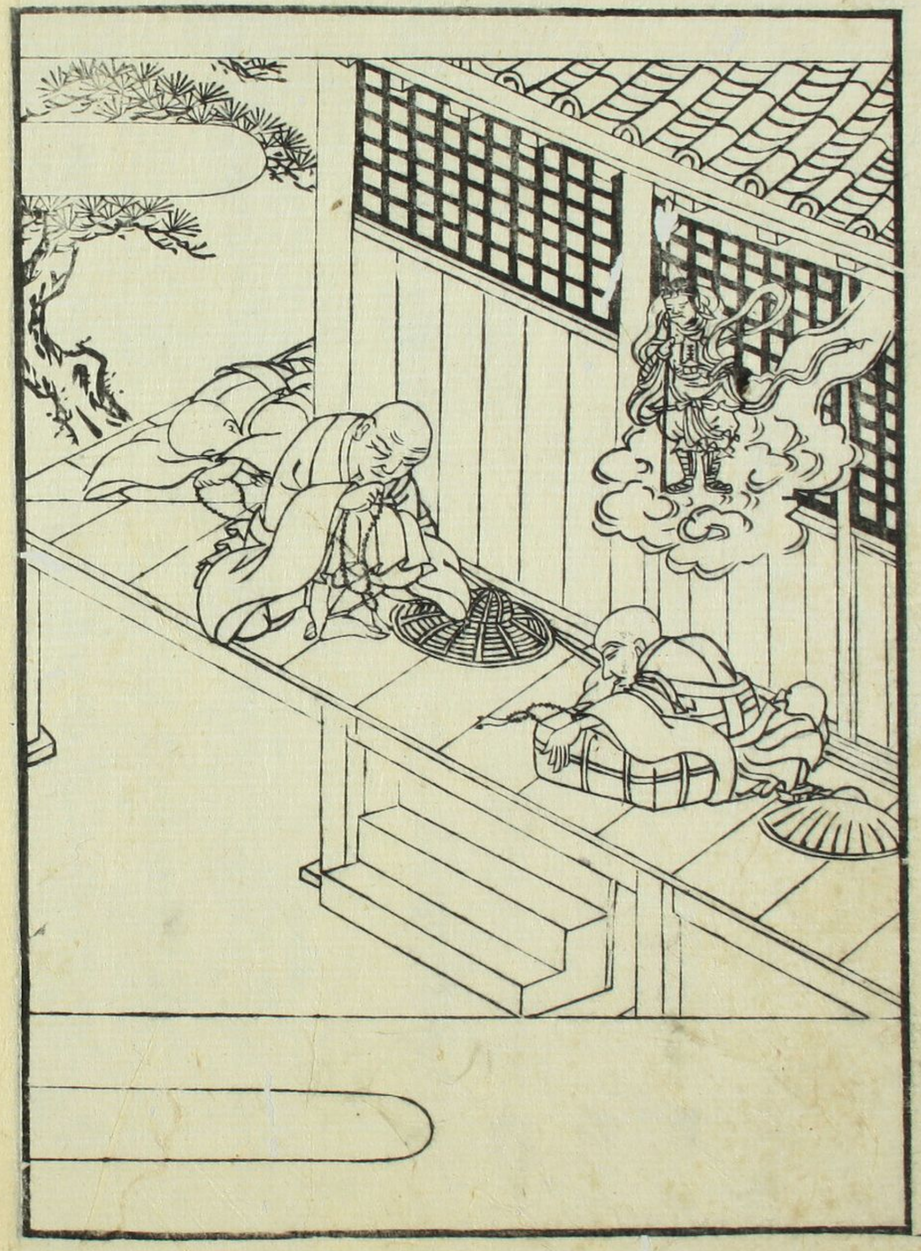
なりて暫く休息ゆんとて立つの人家よ燈火の見へ
立ち墨しゆ人の光明ゆ見あてゆ人ゆ僕と
当社の祝宮と名乗り今夜ゆ宿ゆ逗留とるに唯今
夜ゆわゆ形もなく校現の御若ゆ見ぞらむ
宮僧の唯今ゆ氏る人事ゆ必誠と思ふ丁寧よ
食庭と設もゝと紙を貴僧某此方人何で垂迹人ま
乃ゆ神勅を此なり不心と思さらんや生涯ぐ
よゝなり奉ゆ名ゆ立かゝり所ゆ仍て一日逗留ゆ
て教化ゆ事人ゆ事ゆ聖人の化導神明乃
御心よ叶ふ人なり

同下旬駿河國阿部川よりのぼりて所々
をあらためて旅人渡る事かぎりなし聖人も筑紫下
させ給ひしよりの方へいくばくかを僧一
人来りて中さく川水はゆたかに流れ川の業門は
こゝをもてはじめなりいざせたまへ供奉の人々も我も附
て渡らせ給へとてかひぐ敷聖人の御手をとり
川へ入るゝ程なく水は膝もとゞまで笑ひ
渡りたまひて人々をみ彼僧たちまち笑の中へ
入ぬ人々大ふ驚きあやしみて笑ひ
ゐたりしかば常陸國霞浦にて得ひ

る所の本像を社殿負て登りゐるゆゑ本佛
の膝より下水よりのぼりて中ゆくりなん今の
僧を社佛化現ゝたまふ事思議なりとも
中ゝ為るなり
尼すゞ有信の業化まして九月之
旬より遠江國素畠の專修房の宿所へ来り
社をもよ法化をたゝむるの多りまゝ專修房
ゝ留りまゝ年紙終り

聖幸二月奈畑と云く桑名郡の御寺より
入り給ひ又尾張伊勢長濃なんど所々を勧ぜられて
月下旬の比長濃より近江を越て木辺村入り給ひ日既
に暮ぬ供奉の人々その村の天王堂より出て茶屋どもより
寺僧こゝに来り許び聖人堂く安安いばくを旅宿
せかしゝて天王堂の縁ゝりかゝを敷て座の松ゝけ
て夜氏明かす明方に見沙門天王寺僧〻村の長石
塁氏父子四人の者り我天帝の命に交て此界
の仏法を守護を流る今仏法弘通の高僧来て我
堂を宿せり疾く速に依て法を授ん〻〻又聖

人に若くのごとく我ごろ師と法華経を
を所持の霊像法華堂に安置して此地に法
法弘めらるべし我ハ倩に遠く師の法を守ん
と聖人不思議の思ひとなしかに不信僧若
性大園石塁氏親子若まわりて件の法を
聖人を示霊若の通法師の如くに函蓋相
符ところなくして聖人法留りかの後
に入り給ふ震浦感得の如来法本堂に安置し毘沙
門天氏別殿に移して永く天宗寺に石塁
左衛門もまた門弟となり干時四條院御宇弘

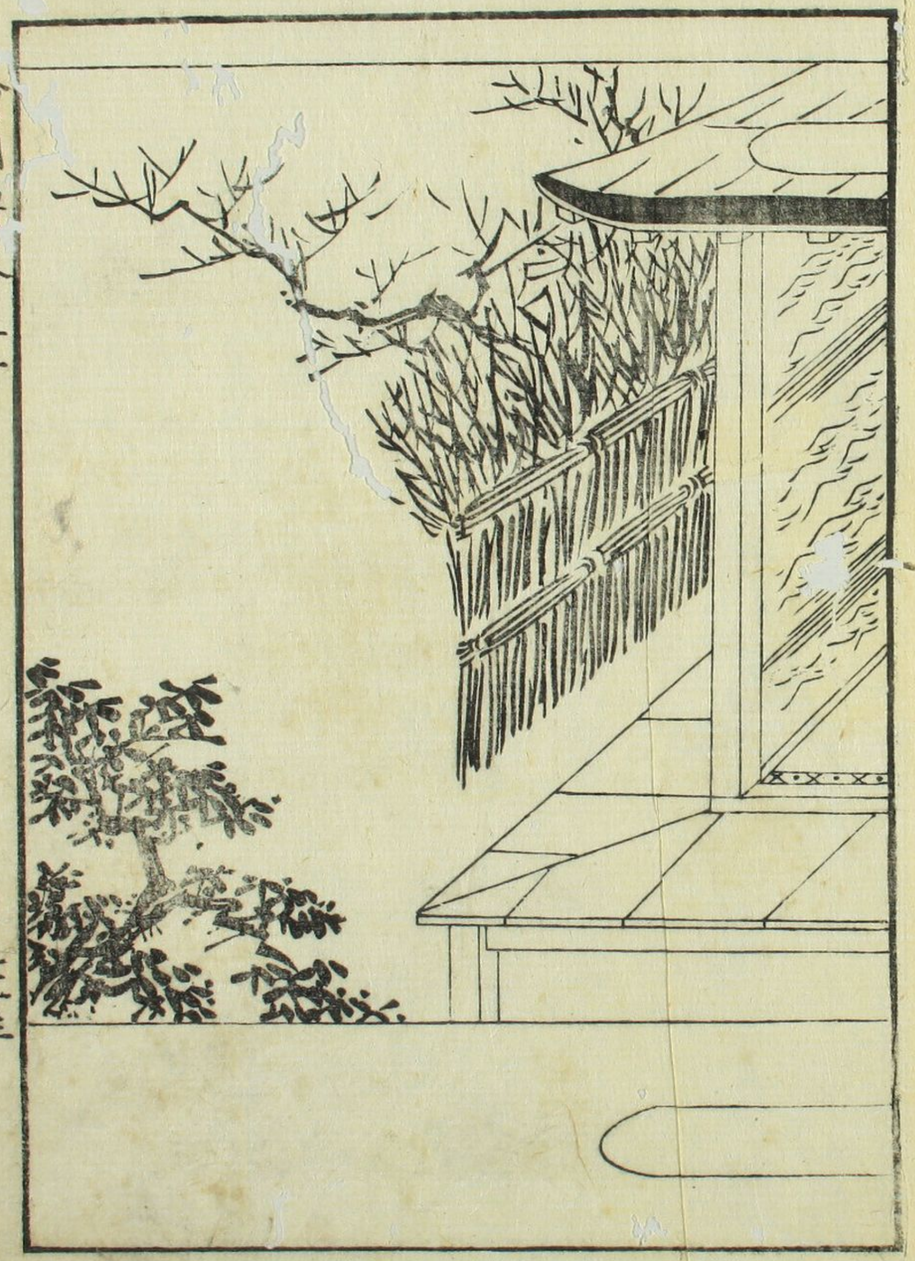


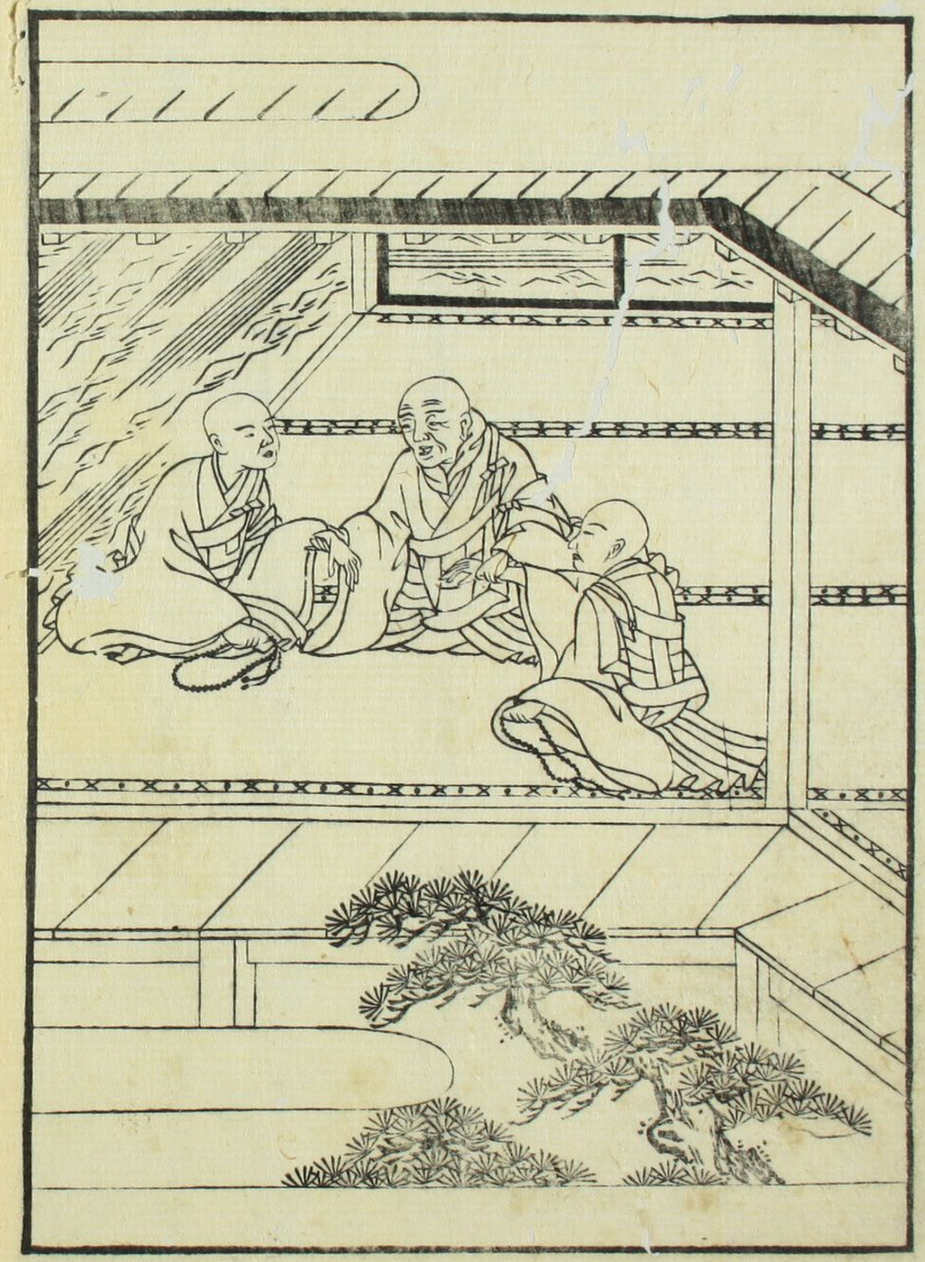
嵯峨元年乙未四月十四日なり更に七月まで
寺に至て法雨を注ぎ給ふ後天女の寺に
降て錦と織の帳に因て勅号を賜て錦織
の寺となづく
同年八月四日法ひに都に帰まして光明峰の
御坊に入給ひ毘盧の印信法師に授給ひ
入滅と沙汰する所なり後九條殿も西洞院の
御所と称しまひく玉日の御善提の為にも仏を
ぬ小坊を建て切に仰ぎ給ひ延応元年九月の比
俄に小雨降て一時に仰たまひき聖人仰て言く

今を都を居所深く専信に東国に下て念仏
性信に志を合せて念仏を通せしに若干も
伊勢に下り未熟の若干を教訓すと都に顕智
一人して事を聞ぬ毘盧もわ〳〵に伊勢へ参り
く御坊をたび給ふ田舎へ下り給ひ
十箇の十月にまたび東国に赴てまた二十
年の春秋を暮して今又京に帰り給ひ情
徒事と思ひ給ふ歎歎して夢のごとくなり
く乃新金のむすびと訪へ給ふ給ふの
煙に立のぼるもいとう色の芝蘭の友に尋給

べつかく化野に露しく清水ねんりて御帰洛の初
より毎月十五日源空聖人の月忌とも人〻に
集會せしめ聲明の宗匠に居給て念佛勤
行して神妙に師恩に報謝しまつる
月月の来帰洛御式に蓮位房性信房
京に人の聖人御洛の時思召もよおわり
して道より返事たりけるが性信は横曽根よ
り蓮位は高田より夫佛と人の御名代として初め
須臾もなりしに聖教に対して登せる翌年三月
の末南京乗光房と初めて東國の御門徒ども日

に進て尋ねるべきものなりとて
武州の二條富小路より盛を一條柳原又を
三條坊門河東の岡崎石水の邊處々に移住
なりし
元禄三年五月上旬真佛上人上京ありて
御の御坊にて聖人に対面ありて関東の
笑来ありきまりとして月月中旬顕智房に
東國より下りし十月中旬に夫佛上人も高田
に下りしなり





専空房は聖人御上京の時御供して出立つかまつり
し聖人御用ありて武蔵国矢口の渡
りに下りて陸奥より帰り給ふ法義弘せら
れるが五年の春秋聖人法蓮せざるべく候よ
ゆゑに思奉りて暦仁元年十一月より顕智房
を付てこの京せられ西阿院にて聖人御
対顔まして関東仏法の有様様々
ゆゑ御ものがたりなり御対面専空と九
ヵ月聖人のもとにありて夫仏を我躰なり顕
智と専空とたのもしきなりして欲去の

涙は咽ぶ生涯時々にて二代相承の徒人え
らんと人々ふかく思ひ給ふ
嘉吉三年八月専空之

親鸞聖人繪詞傳卷二終